

瓊子と其の従兄との間に、それほど込み入つた關係などがあらうとも思はないでゐた上に、彼女の病氣を單に病氣として報告され、また次第に回復されて來た彼女の健康と表面上の快活さとを、かなり誇張して話し聞かされてゐた自分は、耶須子の勸めるが儘に彼女と一緒に、瓊子等の處へ押しかけるつもりで箱根へ行つた。

けれども、愈々湖畔まで來て見ると、流石に私には、招かれないお客として、のみならず多分は歡迎されさうにもないお客として、構はず乗り込んで行くだけの厚かましさが足りなかつた。その癖直ぐに引き返してしまふことの諦らめも付かず、さんざさうした煮え切らなさを齒がゆがつてゐる耶須子と共に、瓊子等の宿から二三丁ばかりを距てた、そして斜めに向ひ合つてゐる或る家に、人目を憚るやうにして泊り込んだものである。

黄昏時に、向ふに見える新しい建物が、瓊子等のゐる處だと聞かされた時、その家にせめて灯のつくのを、どんなに待遠しく思つたか！ やがて、明るさうな灯がついて、そこに二人の若い婦人らしい姿さへ見えるやうに思つた時、それに見入つた私の愚かな熱心さを、耶須子がどんなに人悪く笑ひ興じたか！ 翌る日の朝、彼女がからかひ半分に「いかがです、オペラ・グラスでも借りて上げませうか」と言ひ出した時、私はそれを眞面目な思ひつきとして受取らないでゐられなかつた。そして實際にオペラ・グラスを借りて貰つた。

そのオペラ・グラスは、折々縁側へ出て立つたり、欄干にもたれて直ぐ目の下の水をのぞいたりする二人の婦人の中の、どちらが茂であり瓊子であるかを、また瓊子がどんなに屢々、妹より以上にすらも微笑して松田へ話しかけてゐるかを、更にまた彼女が回復期の婦人に特有な美しさを、その全身へ、どんなに惜しげなく發揮してゐるかを見せてくれた。

そして正午過ぎに彼女等が、その宿の下から舟を出して、湖水の上をうば、この方へ渡つて行つた時、その二つの洋傘が蝶々の羽ほどになり、三川な帆布が枯葉のやうに見えて來た時、私も遂に障子の外へ出て、いよいよ見えなくなるまで見送つた。

是から毎日、斯うした日課をばかり繰返されることの馬鹿々々しさを先見した上に、斯うして私と二人つきりで外へも出ないやうにしてゐなければならぬことの迷惑を、流石に堪へがたく感じて來た耶須子は、その日の夕方に私を残して置いて東京へ歸つた。

耶須子の歸つた翌日も、そのまた翌日も生憎の雨降りで、向ふの宿では、終日雨戸をさへみんなは繰り明けなかつた。

けれども、さうした二日間の間合せでもあつたかのやうに、三日目は珍らしい好い天氣であつた。そして障子にはまつた玻璃越しに、朝程から油断なく見張つてゐた私は、午後の二時頃になつて、茂と松田との二人が散歩に出て行くところを發見した。

彼等は権現様の前を突ききつて、水際を少し離れたり再び近づいたりしながら、若葉がくれのうねうねとした路を歩いて行つた。折々申し合せたやうに背後を振り返つて見るのは、誰かが彼等の後を追うて来るのを迷惑がつてゐるやうにも見えた。かと思ふと、松田が路の傍の大きな切株が何かに片足をかけながら、ステツキで草を薙いだりなんかしてゐる様子は、連れの来るのを待遠しがつてゐるやうにも見えた。

ともあれ、彼等が湖水へ突き出てゐる或る岩角の上まで行き着いて、その大きな杉の木の下で真白な材木か石のやうな物に、相並んで腰を下ろした時、私の目とオベラ・グラスとは幸福な彼等をそこへ見棄てて置いて、彼等の来た道を逆に取つてかへした。そして町端れの處まで来て、ものの二三分も待つてゐると、丁度芝居の花道からでも現れるやうにして瓊子の姿がそこへ現れた。

彼女がその手にさけてゐた洋傘を開きながら、眩しさうに太陽を見上げた時、その顔を、私から云へば太陽のやうにまぶしいその顔を、あまりにもまともに見た私は、私自身がその場所に突立つてゐたかの如く、覺えず衝動的に體を引いて、その途端に眼鏡をさへ膝に落したのである。

恐らくは顔を紅らめて四邊を見廻はしたあと、ほつと息を吐いたあと、けれども胸の動悸を愈々高められながら、再び私がオベラ・グラスを取上げて見た時、彼女はもう、さきほど松田が草を薙いだ邊を通り越して、水際にごくごく近く、つつじの花が一面に咲いてゐる處へ來てゐた。そしてどうしたのか、

びたりと其處に足を停めて、その儘ちつと立つてゐた。

——その時の光景を歴々と眼前に思ひ浮べて來た延雄は、今迄閉ぢてゐた目を思ひ出したやうに見開いて、現在彼の目の下に、庭一面のつつじの中に立つてゐる、妻の背姿を再び見た。そして前と同じやうに頭をかしけてゐる彼女が、前と同じやうに太息をついてゐることを想像して、自分自身も太息をついたあと、書齋の中を靜かに歩きながら、更にさきほどの回想のあとをつづけた——

瓊子は、今そこに立つてゐるやうにして、あの時あそこに立つてゐた。けれどもあの時の私は、彼女が茂やその愛人の方を見てゐるのだと思はないで、足下の花の目のさめるやうな色を見入つてゐるのだとばかり思つてしまつた。そして暫くしてから、彼女が靜かにそこへつくばんだ時、それはきつと花を折り取るつもりであらうと思つてしまつた。

やがて洋傘をすほめて傍へ置いて、少しよろけるやうにして立ち上つた彼女の手に、實際に折り取られた白つつじの一枝があつた。その一枝をふりかざして目庇にしながら、花の間をあちらへ行きこちらへ行きしてゐた彼女は、お仕舞ひには本當の水際になつてゐる。水苔の黄色く乾いた石の上へ出た。氣をつけて見ると、いつの間にか草履を脱いで、白足袋ばかりになつてゐた。あんな危い處へまで出て來て、一體何をするつもりであらうかと、さう思ひながらひとしほ熱心に見てゐると、彼女はそこに再びつくばんで、そして彼女の目の前に群を離れて、ぼつねんと咲いてゐる一株の薄赤いつつつじの方へ、白い

花をもつた白い手を、或は別の白い手をさし伸べようとした。

その刹那に、彼女ののつてゐた大きな石が、不意にぐらぐらと揺れ出したやうに見えた。いやそれよりも、眩しく日光を射返してゐる湖水の面が、急に一方へ傾斜し出したやうに見えた。

あッ！ 危ない！ と辛うじて私の言ひ得た時、私の耳にはもう物凄く水の撥ね飛ばされる音が聞えてゐた。聞えたやうに感じてゐた。不覺にも目からはなした眼鏡に、急いで再び見當をつけて見たけれど、瓊子らしい人の影は何處にも見出されなかつた。

それから私が、どんなに狼狽して、狂人のやうになつて、階段を踏みはづしたり、郵便函に突き當つたり、足の生爪を剥かしたりしながら、あのつづじの處まで駆けつけたか！ そして僅かに泳ぎを知つてゐると云へるばかりの私が、どんなに勇敢に、聊かも躊躇することなしに跳び込んだか！ 底へはひるほど冷くなつてゐると云ふ、その上深さも分らないあの湖水の中へ！

あの湖水の底から、瓊子はともあれ、切めて私なりとも再び永久に浮び上つて來なかつたなら、私はどんなにより、幸福な人間であり得たらう！

けれども私は浮び上つて來た。先づ彼女をあんなにも不幸にし、次ぎに私自身をもこんなに不幸にすべく浮び上つて來た。

彼女のあの細い體を片腕に抱きかかへながら、すつかり冷くなつて沈んでゐた私は、彼女と一緒に引

き上げられてからも、再び息を吹き返すのに、彼女より以上にさへひまどつたとの事である。

この偶然の出來事が動機になつて、あれほど行き悩んでゐた彼女への私の求婚問題が、再び有望に進行しはじめた時、未來といふものを知らない生物としての愚かな私が、私自身をどんなに幸福に感じてゐたかよ！

けれどもいよいよの決定にさき立つて、彼女は半ば耶須子の口を藉りて、半ば彼女の母の手紙を通して彼にまで、彼女と従兄の喬とのそれまでの關係に就いて色々の事を告白して來た——例へば、二人が何時からとも分らないほど久しく愛し合つてゐたと云ふこと、一緒に上海へ行つてしまふ積りの計畫が失敗したと云ふこと、それから彼女が死ぬほどの病氣をしたり、死に得られるほどの劇薬を服んだりしながらも、やつぱり死なないでゐた間に、喬は永久に彼女等から影をかくしてしまつたと云ふことなどを。

そして彼女は、斯うした過去を有つてゐる彼女自身が、所詮私の妻となるに適當してゐないだらうと云ふこと、それ故この縁談の諾否を言はねばならないのが、實際は彼女自身よりも寧ろ私であらうと云ふことなどを附け加へた。

取次いだ人達がどんなに細心なオラアトに包んでくれてゐたにもせよ、これらの告白と意見とは、立處にその辛辣な効果を示さないでゐなかつた。それらの言葉は、文字通り私の心臓を冷たく突き刺し

た。突き刺された心臓は、一滴の血をも流すことなしに、いきなりびたりとその鼓動を止めてしまった。しかしながら、暫くしてから不思議にもそれが、ひとりで再び鼓動しはじめた時、私は私の心臓を串刺しにしてゐる白刃が、新によみがへつて來た私の血によつて、次第に、次第々々に暖められて行くやうに思ふことを禁じ得なかつた。否、さうしてそれを暖めて行つて、熱して行つて、遂にそれがどろどろに融けてしまふまでに熱してやるよりほかに、私はもう生きることも、また死ぬことも出來ないのであると覺つたのである。

そこで私は、私が聊かも彼女の過去などを問題にしてゐないといふこと、しようとも思つてゐないといふこと、またそれほどの執着をどうすることも出來なくなつてゐるといふことを、彼女及びその周囲へ傳へて貰つた。

こんな具合にして、どうにかかうにか纏つた結婚が、どんなに無理矢理な不自然なものであつたか、それが當事者達の生活をどんなにみぢめなものにするか、どんなに救ひがたくみぢめなものにするかは私自身も勿論、久しく氣附かないではゐられなかつた。

一般に結婚とか、所謂新しい家庭とか云ふものが、こんなものかも知れないと、自分自身を謀魔化してさう感じ得ることの爲めに、私がどんなに無益な努力をして見たか！ それにも拘はらず、おせつかいな新聞や雑誌の口繪なぞに、所謂新郎新婦として私等達二人の寫眞を出してくれた時、それが如何なる

點に於てともなく、どんなに釣合はない、どんなに不調和な一組として私自身の目に見え、私自身の心に映つたか！

固より格別の惡意もなしに、好んでよその家庭の秘密なぞを素破ぬくところの或る婦人雑誌で、どこから材料を仕入れて來たものか、瓊子が過つて水に陥つたのを、偶然通りかかつた私が救ひ上げ、その私の騎士的勇氣に對する彼女の敬慕と感謝の情とが愛になり、私との相愛になり、遂に私達を結婚さすまでになつた云々と云ふ所謂『ロオマンス』を、記者一流のロマンティックな甘酸っぱいやうな修辭で書き立ててくれた時、否それよりも他の或る雑誌の噂話か何かの中に、私と彼女とを多年相思の仲であつたなぞと書いてくれた時、私がどんなに持つて行き場のない、どんなに名狀することの出來ない不愉快を経験したかよ！

そして耶須子が、私達二人を結びつけた不思議な運命の象徴として、木當にあの湖畔から取寄せた二株三株をさへ一緒にして、あのつつじをあそこへ植ゑさせてくれた時、そのなまかな好意を斥けかねて、心の内に苦笑しながらも御禮を言はされた私が、どんなに私自身を皮肉な目で見なければならなかつたかよ！

妻としての瓊子は勿論、正直で、謙遜で、従順で、深切で、取り分け賢明で、あらゆる點で申分なく『良妻』であつた。自分の直接間接に知つてゐる限りに於て、あれほどの良妻をもつてゐるものはさう澤

山にないやうにさへ思ふ。

ただ彼女は私にとつて、良妻以上の何物でもなかつた。

戀愛から結婚した婦人でも、大抵は良妻以上のものからして、次第々々にただの良妻になつて行く。さうかと思ふと、純日本的な手續で一緒になつた夫婦の間でも、夫はどれだけか夫以上のものになり、妻はどれだけか妻以上のものになつて行く。斯うした事實を見聞し慣れてゐた私が、私達の場合にも、時の経過といふことに一縷の望を繋^かけてゐたのに拘はらず、彼女はつひに結婚した當時の彼女よりほかの如何なるものにもなつてくれなかつた。

だんだんに温くなつて行くよりも、寧ろ冷くなつて行くやうに見える彼女は、彼女の存在は、それに觸れるほどの如何なる物をも冷くした。それを取りまく一帶の空氣をも、常に水のやうに冷くしてゐた。水のやうに！ さうだ、私達があの時冷くなつて沈んでゐた、あの湖水の底の冷い水のやうに！

——この最後の言葉を、二たび三たび心の中に繰返してゐる間に、實際に今、光線もとどかないほどの深い水底をもぐつてゐたかの如く、手で水をかきわける時のやうな様子をしながら、ぶるぶると體を震はせた延雄は、やがて思ひ出したやうに窓際に立ちどまつて、今一戸窓越しに庭の方を見下ろした。

瓊子は矢張りもとの處に、もとの姿勢を續けて立つてゐた。彼女を驚かさう位に、徐かに窓の扉^{びら}を押し開いて、延雄がその手を外に差しのべて見ると、本當に霧のやうな物のふつてゐることが感じられた。

「その上、風もだいぶ冷くなつてゐるのに！」と思ひながら見てゐると、やがて彼女は袖で口を覆ひながら、コツコツと微かに咳をし出した。その咳はやまつたかと思ふとまた直ぐに出た。

「だから言はないこつちやない。」と心の中にやさしく叱^{こた}言を言ひながら、彼が今度はわざとらしく音を立てて、窓の扉を閉ぢかけた時、瓊子ははじめて頭をもち上げて、音の聞えた方へ彼女の上半身をふり向けた。そしてだいぶ前から彼が自分を見守^{みまも}つてゐたことに氣付いたらしく、さきほど咳きつづけた爲めに紅くなつた顔に、自分の毎度の不注意をわびるつもり^{みづか}のやうな、例の淋しげな微笑を含みながら、屋根下の方へ、家の中へはひつて行つた。

それから彼も窓の扉を閉ぢてしまつて、机と仕事との前へ歸つて來ただけけれど、さきほどまで讀んでゐた場所を捜し出さうとしてゐると、ついまたしても餘計な回想や考なぞの方へ引き込まれて行つた。そしてとり分け執拗にいつまでもいつまでも反復して考へられたのは、もともとあまり丈夫の方でもない瓊子が、近頃またあんなにも目に立つて元氣をなくしてゐるといふこと、並びに、ああしてほんやりと物を思ひ耽る傾向も、前より一層ひどくなつて來てゐるといふことであつた。

——彼女は一體どうしたのであらう？ あんなにも食慾がなくなつてゐるのは、またあの咳がやつぱり止まならしいのは、ただの風邪なぞでなくて、もう少し念の入つたものではないだらうか？ それから、あんなにも考へ込む癖が、最近特にひどくなつたらしいのは、そもそもどうしたといふのであら

う。それがあんなに元氣をなくしてゐることの原因なのであらうか。それともその事の結果なのであらうか。もし又そんな事に格別の關係もないのだとしたら、彼女は何をさうまで考へ込まねばならなくなつたであらうか。彼女の上に何が起つて來てゐるのであらうか。

冷静に觀察して見れば見るほど、彼女がこれまで折々考へ込んでゐたのとは、どつか異つた處があるやうに感じられる。さうだ、たしかに異つてゐる！ 彼女はたしかに何等かの新しい事件と問題とにぶつかつてゐる！

では、その新しい事件と問題とは？ それは少しも見當がつかない。それは彼女の、あの苦しげな恐ろしい太息の中に包みかくされてゐる！

こんな事をそれからそれへと考へてゐた延雄は、それでもやがて自分で自分をたしなめなければいけないことに、少くとも差し當つての仕事に一段落をつけるまで、なるべくこんな問題を忘れらやうにしてゐなければならぬことに氣がついた。そしてお茶でもいれさして見る爲めに、手をのばして、机の端に置かれてゐる呼鈴を鳴らした。

階下へ通じたかどっかを危ぶんで、彼が二度目の呼鈴を鳴らしつづけてゐた時に、その書齋の入口の扉がしづかに開いて、誰かがそこへはひつて來た。

『お茶をくれないか。番茶でも紅茶でも……』

斯う言ひながら背後へふり返つた延雄は、女中かと思つたのが瓊子であつたこと、そして彼女がもう彼の注文しようと思つた物を持つて來てゐることを見出した。

『氣を利かして、ちやんともう持つて來てくれたんだね。』

『きつともう、召し上りたい時分だらうと思ひましたから。まだ、昨日のカステラもありますけども。』と言ひながら彼女は、彼の好きな甘納豆の蓋を取つて見せた。

彼は早速茶碗を取上げて一口呑んだあと、早速また甘納豆を口に入れながら、椅子を立つて、室の片隅へ行つて、彼自身がかけるのでない別の椅子を一つ、机のそばへ運んで來た。そして其間に側卓の輪挿しの形を直してゐた彼女が今、肩籠もまだ一杯になつてゐないことを見たしかめたあとで、別に御用はと云ふやうに彼の顔を見ながら出て行かうとした時、彼は自分のもの、椅子へ復りながら彼女へ言つた――

『少し話して行かないか。』

『でも、お邪魔ですから。』

『何だか頭が疲れたから、あとはお午つからにするんだ。それに一寸、話して置きたい事が――なあに、さう改まつて言ふほどの事ぢやないんだけどもね。兎に角、まあ、そこへお掛けよ。』

急に硬苦しげな表情になつて、言はれるままに良人と向ひ合つて掛けた彼女は、間もなく何かの用事

を思ひ出したらしく立ち上つた。そして入口の方へ歩き出しながら言つた――

『あの、新しんやに一寸、頼んで置く事がありましたから。直ぐに参ります。』

彼女が急いで階下へ降りて行つた時、彼は自分ながら何だかつまらない事を言ひ出したものだと思つた。そして出来れば、彼女が再び上つて来た時、一心に書物をでも讀み耽つてゐるやうに装よそはつてやらうと考へた。

けれども實際に彼女の微かすかな足音が聞えて来たとき、彼の目は自然と書物から引きはなされて、自然と入口の方へ向けられた。そしてそこに、心持呼吸をはずませながらはひつて来る彼女の姿を見つけた時、彼はあだかも純粹の暗示情態に置かれた人間なんぞのやうに口を利き出した――

『一度みて貰つたらどうだらう？』

『え？』

『お前の體の事だがね、自分では別にどこが悪いとも思はないのかい？』

『ええ、別に……』と言つてゐる中に、またもや軽く咳き出した。

『その咳がどうもとれないやうだね。矢張り風邪かぜ位なことだらうかねえ。』

彼女は、それにどう答へるべきかを考へるやうにしながら、黙つてさきほどの椅子にかけた。そして胸の邊を左の手で押へて、いつまでも沈黙をつづけてゐた。

『そこが痛むのかい？』

『折々。ほんの一寸ですけども。』

『さうか。』と言つた自分の言葉を、餘りに重苦しく感じた彼は、直ぐに調子をかへて言ひ續けた、『もつとも、神経痛でいろんな處が痛むこともあるもんださうだからな。それに此頃、夜分ねられるかい――よく？』

『あまりよくは――』

『さうだらう。どうも近頃、一體に……頻りに何か考へ込んでるやうだね。さう見えるんだよ。』

目を擧げてちらつと良人の顔を見た彼女は、再び目を伏せて辛うじて彼に氣附かれた位の溜息をついて、それから例の淋しげな微笑をふくみながら小さい聲で言つた――

『つまらない事ばかり考へるんですわ――考へなくなつていい事を。』

『考へなくなつていい事を。』と彼は、彼女を追窮するやうな氣持で、彼女の言葉をその儘に反復してゐる内に、此の場合用心しないと、自分自身がどんなに性急になり、どんなに言ひ過ぎをするかも知れないといふことに氣が附いた。そこで次ぎのやうな無意味な言葉をそのあとに附け足してしまつた。

『そんな事を考へるのは、馬鹿だなあ。』

『全く馬鹿ですわ。』と言つて、彼女は前よりも一層淋しげに微笑した。

「兎に角、一度御醫者に、田村君にでも診て貰はうぢやないか。田村君の家へ出かけて行くんだつたら、たしか午前中ならいつでも——」

斯う言つてゐる内に、誰かの足音が階段の方に聞えたので、延雄はその儘口をつぐんでしまった。そして、思ひ出したやうに一口茶を飲んだあとで、入口の方をふり返つて見ると、女中の新しんやがそこに現れてゐた。

『あの、旦那様に、御電話でございます。』

『電話?』と言ひながら延雄は起ち上つた。『何處からだい?』

『シノダ——様と仰しやいました。』

『篠田?』と半ば口の中に言つて見て、小首をかしけながら彼は下へ駈け降りた。

電話口へ立つて、改めて問ひたづねて見ると、篠田は瀬野せのの聞き間違ひであつた。

以前の赤沼夫人であつた瀬野耶須子は、至急に御目にかかつて、一寸御願ひしたい事があると云ふのであつた。そして、成るべくならば明日にでもして貰ひたいと延雄から申出て見たけれど、ほんの十分か十五分でもいいから、是非々々今日お邪魔さして下さいと言ふのであつた。

せんかたなく彼は、承諾の旨を答へて電話をきつた。それから二階の方へ引き返して來ながら先づ考へた——耶須子の用事といふのが何であるにもせよ、瓊子はむしろ家にゐない方がよい。彼女のあらし

た様子は、とり分け此の頃の耶須子に見せたくない。私達二人のこんな關係は、耶須子がそれに興味を有つてくれない爲めでなく、近頃一寸可笑しな興味をもつてくれてゐるらしい故に、なんだか實際を知られたくないんだと。

そこで、階段の途中から引き返して行つて茶の間へはひつた彼は、その時もうそこへ下りて來て、長火鉢に炭をつぎ足してゐた瓊子に言つた——

『また少し晴れて來たやうだが、何ならお前も早速行つて來ちやどうだ? 田村君の處へ。』

『うむ。一日でも早い方がいいからな。それに、その内その内と言つてると、ついきりがつかないもんだよ。』

『それもさうですね。』

延雄から言ひ出した大抵の事に、かつて反對を唱へたことのない彼の妻は、此の場合も素直に出掛けに行くことにした。そしてお醫者の方の都合を念の爲めたしかめて見た上で、留守中の用事を女中に言ひつけたりなんかしながら、そこそこに支度をして出て行つた。

瓊子が出て行つたや否や、直ぐに耶須子がやつて來たと云へば、拙劣な芝居の、拙劣な人物の出入でしんいれを想見させられるほどにウツらしいかも知れない。けれども實際の人生には、斯うしたウツらしい事件が

往々にして起るのだから仕方がない。耶須子が稍や急ぎ足に、草履の音を軽く立てながら門をはひつて来た時、玄關横の郵便函をのぞいてゐた女中の新やは、大きな八手と石榴の若葉とを通して彼女の姿を見て、瓊子が引き返したのか知らと疑つた位である。

耶須子の良人の赤沼は、大戦以來の好景氣に乗じて、矢鱈に活動の手をのばし過ぎた一人として、此の年にはひつてからの大變動を待たず、昨年の十月頃すでに致命的の打撃を受け、善後の策にあせればあせるほど破綻の百出を來し、つひに再び立つ能はざるの慘況に陥つてゐた。

そして其の居所を明白にすることさへ出來なくなつた彼から別れて、耶須子は再び一人者の生活をはじめてゐた。間もなく番町の方に開いた彼女の私塾には、もとよりさう澤山のお弟子さんも出來なかつたけれど、女學校からの歸りに、音楽や外國語などを教はりに寄るのは、いづれも皆相應に立派な家庭の人達ばかりであつた。

彼女を以前の家庭教師時代から知つて居り、とり分け赤沼夫人であつた時代の彼女の地位やら勢力やらを、かなり嫉視して居つたらしい某夫人は、彼女の現在の境遇に同情して、色々の援助を與へて居ると言ひながら、一方に於ては彼女がもう、お弟子さん達の家庭へ出入して、あの容貌と才氣とをもとで、随分凄腕をふるひ出してゐるといふやうなことをも言ひ觸らした。

それらの言葉がもとになつたのかどうか、耶須子は赤沼よりも一廻りも年上の或る實業家から、内

々で特別の補助を受けてゐると云ふやうな噂もあり、そのまた實業家が日本人ではなくて、横濱の一米國人だといふやうな噂もあつた。

儲で、さうして何人かから内々で補助された彼女は、また内々でもとの良人に貢いでゐるさうなと誰かが言ひ出せば、それをきいた人々は皆、成程ありさうなことだと合榘あいつを打ち、いやあの人の事だもの、赤沼の事なんぞ路傍の人さとの誰かが言ひ出せば、それをきいた人々は皆、成程それもさうだなと合榘を打つた。

ともあれ、彼女は一私塾の收入位では到底出來さうにもない贅澤な、派出な生活をしてゐた。その服装の如きは、前よりも若々しくしてゐる爲めに、どうかすると一層高價なものになつてゐるやうにさへ見えた。そして、さうした若々しい服装が、彼女には聊かも不調和でなかつた。彼女を近頃はじめて知つた異性などは——勿論、とくに斯う言つて置く必要がある——せいぜい二十五六か七八であらうと思つてゐた。實際の齡がそれより十歳も上であることは、わざわざ言つてきかす人があらうとも、恐らく容易に信じなかつたであらう。

彼女が嘗つて、延雄等の結婚を成立たせる上に、一方ならぬ骨折をしてくれたのは、彼女及び彼女の良人の打算の好意からであつたとは云へ、とにかくその好意を忘れたと思はれたくない延雄は、その後機會のある毎に彼女へ酬いるやうにと努めて來た。とりわけ、彼女が現在のやうな境遇になつてからは、

一層その心掛をもたなければならぬことを知つてゐた。

それにもかかはらず、彼はいつの間にか、彼女の家を訪ねるのが億劫になり、彼女から訪ねて來られるのが迷惑になり出した。その事の理由を最初の内彼は、自分達夫婦の間のだんだんと冷くなつて來た關係を彼女に知らせ、どのみち益に立たない色々な世話を焼かれたくないからであると考えた。さうしたまなかな世話を焼かれることが、事によつたらいいよ自分達二人をみじめなものにするかも知れないと思つてゐたからである。

ところが最近に至つて彼は、耶須子が自分達夫婦の間をそれほど心配してくれてゐるのでなく、寧ろ何等かの事あれかしと云つたやうな、無責任な、無責任以上の好奇心で見守つてゐるらしいことに氣付いて來た。そして、何人からもあまり知られたくない自分達の家庭の實際を、とり分け彼女から覗き込まれたり嗅ぎ出されたりしないやうに、十分警戒しなければならぬと感じ出して來た。今日も成るべく瓊子に會はさないでしまひたいと思つたのは、それよりも、瓊子と自分とが相並んで、彼女の前にさらされることを避けたいと思つたのは、畢竟かうした事情からであつたのである。

偕て今彼は、もう一足おくれれば瓊子が耶須子にぶつかるころであつたことや、耶須子の至急に御願ひしたい云々が何であらうかといふことなどを考へながら、下の客間へ降りて行つた。

一應の挨拶を済ますと共に、彼は意識的に一寸無愛想な顔をして、成るべく早く用談にはひりたいた

いふ意味を訴へた。するとその意味が通じたからのやうにでなく、寧ろはじめからそのつもりでゐたかのやうに彼女は言ひ出した――

「御願ひしたい事といふのは、ほかでもございませんがね、貴方は栗塚といふ學生――の名前を御存じですか知らず？　〇〇科の二年ださうですが。」

「栗塚と？　――〇〇二年の。」

彼は半ば獨白のやうにゆつくりした調子で斯う言ひながら、栗塚と混同し易い名前や顔のいくつかを思ひ出したり、それを混同してゐてはいけないのかと考へたりしてゐた。

「色の白い、前齒に金を入れてゐる……そして少し猫脊のやうにして――」

「ああ、あれですか。あの馬鹿に身長せいちの高い。思ひ出しました。」

「あの人の御妹様が私の方へいらしつてゐるものですからね、あの人も近頃御懇意になつたんですね。學校の追試験の事を、私からは非々々御願ひして見てくれと云ふんですよ。」

「ああ、さうですか。」

「何でも、來週の中に受けさせて頂かなければ、駄目になるんですつてね。」

それから彼女は、本人からきいた委しい事情を取次ぎ、延雄から特別の便宜を計つてやつてくれることを希望した。さうした希望を満たしてやるのは、殆んど公然に、大抵の教授や講師等がやつてゐる事

でもあつたので、延雄も結局承知の旨を答へた。

『それで私も安心しましたわ。でないと、私があんまり安請合をしたことになつちまひましてね。まあ、よかつた。』

『それ位の事なら、一寸御手紙でもさう仰しやつて頂けば——』

『でも、それぢやあんまり何ですしね。それに此の間中から一度御目にかかつて、是非是非……』

斯う言葉尻を曖昧にきつて彼女は、別に何か非常にディリケートな問題と用件とをでも控へてゐるさうに思はせた。彼は黙つて、彼女の指に光つてゐる寶石を見てゐた。そして彼女から次ぎの言葉をきいた時、ちやんともうそれを豫知してゐたやうに感じたのである。

『奥様は？ 瓊子様は？』

『今し方、一寸出て行つたやうです。』

『御出掛けになりましたの？』

『貴女とほんの一足違ひでした。』と言つた後で、延雄は彼自ら言はなくともよい事を言つたなと思つた。

『一足違ひで？ まあ、残念な事をしましたわねえ。』

『あれも、さう言つてゐましたがね、午前中にどうしても行かなくちや具合が悪かつたものですから、御醫者へ行つたんですよ。』と言つたあとで、彼は彼自ら再び言はなくともよい事を言つたものだと思つた。

つた。

『御醫者様へ？ どつか御悪いんですか？』

『何だか少し、元氣が悪いものですからね、一遍診て貰つた方がよかろうと、さう思つたんです。』

『それはいけませんね。』

斯う言ひながら彼女が、心配で心配で堪へられないといふやうな表情をして見せた時、彼は三たび、

言はなくともよい事を口にしないうでゐられなかつた——

『もつとも、自分では別にどこが悪いとも感じちやゐないんです。ゐないらしいんです。』

『ぢや、ただの神経衰弱位な事ですわ。』

と言つたあとで、急にいたづら者らしく微笑し出しながら彼女は言つた、「延雄さんが、あんまり苛め

たからぢやありませんか？』

『苛めた？ ……私が？』

延雄は覺えず聲を高めたほどに興奮して來た。

『あら、じよ、だんよ。じよ、だんぢやありませんか。貴方の御性格は私にも、よく解つてますもの、そんな馬鹿な事を、眞面目に……』と言ひながら彼女は、彼が興奮から間もなく銷沈へ、むしろ沈鬱へと移つて行きつつあるのを見出した。そして其推移を利用して對話をすすめることを忘れなかつた。『です

から、私は貴方に同情してゐますわ。貴方の方に餘計に同情してゐますわ。いいえ、同情してゐるどころか、責任を負はなきゃならないことを知つてゐますの、實際、私の責任ですものね。」

『貴方の責任つて？ 何が？』と早口に一息に言つた彼は、耶須子の説明をまつまでもなく、それが何であるかを知り過ぎてゐた。そして、そんな知り過ぎた事をも知らない風をして問ひたづねねばならぬ行き掛りを、自分の地位を、弱さを、どうしてくれようかと思ふほど腹立たしかつた。

『それや私にしたところで、満更ウソを吐いてたわけぢやありませんわ。だけど、あの人達御二人の關係についてはね、延雄さんにもつとよくお話しして置くべきだつたと、さう思ふんですの。さうしたら、もつとよく後々の事を考へて下すつたでせうし、またその上での事なら、まさか斯うはならないで済んだらうと、ほんとうにさう思ふんですの。』

『私達の家庭の事なら、別に……別に、それほど心配して頂くやうな事もないんです』と延雄は言つた。もう、どうでもかうでも此の種類の話題から脱出しなければならぬと決心してゐたのである。

『さうして私にまで、御遠慮をなすつてゐらつしやるのが、一層何だか——』

『遠慮をしてゐるのでも何でもありません。』

「でも。」と彼女は、その白い齒をのぞけてなまめかしく微笑しながら、どうしても自分のゐる處へ引きずり込むつものやうに言ひ續けた。「でも、あんまり水臭いぢやありませんか——さうして、なんにも

打明けまいとしてゐらつしやるのは。』

『さう見えますか知ら。』

斯う言つて彼は白を切らうとした。けれども、正面の門を閉ぢられれば、直ぐに擲手からめてへ廻ることを心得てゐる耶須子は、なかなかそれ位ななまやさしい手段で撃退されなかつた。

「瓊子さんがあの、湖水へ落ちた時の事について、松田さん達は、茂さん達は妙な事を言つてらつしやるさうですね。」

延雄はお煎餅のやうなお菓子を嚙りながら、いつまでも黙つてゐた。

「あれは本當の過失けがぢやなくつて、過失けがのやうに見せかけたに違ひないつて、さう言つてらつしやるさうですね。」

「さうですか。」と言つた延雄は、自分自身でもあとで不思議に思つたほどの平靜を保つことが出来た。相手の耶須子には、彼がはじめて聞いたのでなかつたからかとさへ想像された。そしてこの事が甚だしく彼女を苛いらだ立たせたらしかつた。

『貴方にはどうでもいい事だけれど。』と言ひさして彼女は、女性に、とり分け美人と云はれてゐるやうな人達に特有な、残忍な、けれども涼しげな目を彼の目に注いだ。「喬さんはあれからどうしたんでせうねえ。今でも本當に行方が、誰にも分つてないんでせうか？」

延雄は覺えずその目を膝に落した。そしてその膝の上に、手にしてゐた細長い薄つべらなお菓子を、無言の儘べちりと二つにへし折つた。

『おや、大變にお邪魔をしちまひました。』と彼女は、稍やわざとらしく其小さな腕時計をのぞいて見ながら言つた。『下らないお話ばかりして、御忙しい處を、本當に失禮いたしました。』

それから彼女は思ひ出したやうに、栗塚といふ青年の事を繰返して頼んだり、瓊子や瓊子の母などへ宜しくと言つたりして置いて歸つて行つた。

耶須子の歸つて行つたあとで、延雄がどんな氣分へ引き込まれたかは、讀者諸君の御推察にまかせて置きたい。兎に角、その儘直ぐに二階の書齋へ引き返す氣持になれなかつた彼は、先づ茶の間へはひつて來て、何をするつもりともなく長火鉢の前に坐つて見た。そして暫くたつてから、あまり好きでもない煙草を、わざわざ運はせて喫んで見た。

そのあとで、再び何をするつもりともなく、瓊子の机などを置いてある室にはひつた彼は、その小さな紫檀の机の上に『女傑』と云ふ小説かなんぞのやうな一冊の書物を見出した。近づいて見ると、『ツウルゲニエフ作、××××譯』と小さく書かれてゐた。更に中を開いて見ると、彼もかつてガアネットの英譯かなにかで愛讀したことのある『クララ・ミリツチ』の邦語譯であつた。『愛は死よりも強い』といふ言葉を、あの小説の中ではじめて讀んだことなどを思ひ浮べながら、彼がいい加減に頁をめぐつて見て

る時、忽ち彼の手元を滑つて薄つべらな何物かが、鳥の羽根かなんぞのやうにひらひらと舞ひ落した。拾ひ上げて見ると、それは婦人雜誌か何かからきりぬいたものらしく、表は楕圓形な二重の曲線に縁取られた、一人の婦人の半身像であり、その裏は化粧品品の吟味か、社交の技術をでも説いたものの一部分らしく思はれた。

實際はあまり若さうにもない、けれども下膨れの、口元の可愛い色もかなりに白さうな其婦人を彼は、その名前の思ひ出せないのが不思議な位に、非常によく識つてゐる誰かであるやうにも思つた。また、全然知らない人間であるやうにも思つた。

扱てその寫眞のきりぬきを、書物のどの邊にしまつて置かうかと思案しながら、再び其頁をめぐつてゐた時、彼は初めの方から二三十頁ばかりの處に、再び雜誌からの切抜き寫眞のやうなものを見出した。

それも熱く見ると、前と同じ雑誌から取つたものらしいけれど、人物ではなくて風景であつた。しかもどつかの鎮守の社か何かを舊式な繪心で撮影したものだつた。

一つならず、二つまでも、さうした種類の寫眞版などに、さうまで念入な鋏刀をいれて切抜いてゐるのが、何だか瓊子らしくもない。たづねであることを思つたり、彼女のさうなつたのが矢張り不自然でないかも知れないことを思つたりしながら、それらの二枚の物を一緒にしまつて、『クララ・ミリツチ』の譯書を閉ぢて、それをちとあつた通りに、『晶子短歌全集』第二卷の上に置いた。

それから其横の柔い肘突に肘を突きながら、彼が更に何事かを考へつづけてゐた處へ、瓊子はお醫者から歸つて來た。彼女の聲を茶の間にきいた時、はじめて其事を知つた延雄は、一旦起ちかけたのを再び坐つて、其儘に彼女を迎へることにした。

『只今。』と彼女が挨拶した。

『どうだつた？ 田村君はどう云つた？』

『今の處、まだ、どこに故障があるといふんでもないけれど、一體に呼吸器があまり丈夫の方でないから……』

斯う言ひ續けてゐる内にももう、彼女は例の咳をしはじめた。

『用心しろと云ふんだね。』

『ええ』

『それで、お薬でも服むのかい？』

『水薬と散薬と、兩方戴いて參りましたの。』と言ひながら、彼女はハンカチーフの結び目を釋いた。そしてそれから取り出した物を、どこへ置かうかと考へながら、室内のあちらこちらを見廻した。その目が机の上にも注がれたやうに思つた時、延雄はさきはどの『クララ・ミリツチ』の譯本を再び手に取り上げた。『封筒が上になくなつたものだから、一寸それを貰ひに來たんだがね。』

『うまく見付かりましたの？』

『ところが、つい此の小説を読み出しちやつてね。』

『さうですか。』と言つて、瓊子は俄に伏目になつた。けれども、そんな事に注意するほどの餘裕をもたなかつた彼は、忙しげに先刻の二枚の寫眞版を取り出して、机の端に陳べながら言つた――

『これは一體どう云ふ寫眞なんだい？』

『どう云ふ寫眞つて、格別なんでもありませんわ。』と彼女は、矢張り伏目になつた儘で、何かよつほど狼狽したやうな調子で言つた。そのあとから復もや激しく咳き出した。そしてまだ綺麗に咳き止まない内にもう言葉をつづけた。『どつかの女優さんか何かでしたわ。』

『女優？』と問ひ返しながら彼は、それははさまれてゐた小説が、否、その小説の女主人公が女優であることなどを考へた。『何からきりぬいたんだい？ どんな雑誌から？』

『さあ、どんな雑誌でしたか……』

『近頃きりぬいたんぢやないんだね？』

此の時、前よりも一層激しく咳き出してゐた彼女は、黙つてただ、それを肯定するやうになつてゐた。そしていつまでもいつまでも咳きつづけた。

『だしぶ苦しさうだね。』

「いいえ、そんなでもありません。」と彼女はきれぎれに言つて、はじめてその紅くなつた顔をあげた。その長いまつげの下の目も、眞赤に充血してゐるやうに見えた。

けれども、その痛々しげな顔の印象を、頭と胸とへ深く刻みつけられて二階の書齋へ引き返した延雄は、間もなくその印象が拭ひ去られてしまつて、そのあとにかの、會體の知れない女優とかの半身像が、より鮮やかに、より大きく描かれてゐることを氣付いて、少からず驚いた。そして自分で自分に問ひたづねて見た――

「あれは果してどう云ふ婦人であらう？ 果して瓊子に何の關係もないものであらうか？ 私がさう思ひ得る爲めには、どつかに不自然すぎるものがある！ 彼女は、更に新しい不安と疑ひとの中へ私を突き入れた！」

七

それから二三週間を経つた五月中旬の或る日の午後であつた。學校から神樂坂の方へ廻つて用を足した延雄は、あの坂を大方降りきつた處で、背後から聲高に自分の名前を呼び掛けられた。ふり返つて見ると、右の目に白い布の覆ひをかけた、自分と同年位の一人の紳士――延雄はどんな人をでも紳士として取扱はうと心掛けてゐたから――が親しげに笑ひながら近づいてゐた。そして彼が何人であつたかを、一寸想ひ出し悩んでゐる延雄へ、リボンの取れかかつた黒い冬帽を脱つて、背後へ撫でつけた長い髪の毛と、ぬけ上つた広い額と、そこに刻まれてゐる老人のやうな皺とを露はして見せた。

「僕だよ。犬塚――」

「君か。目が片方かくれてると、一寸分らないよ。」と言ひながら、延雄は電柱の横へ後退をした。

「それに、だいぶ暫く會はなかつたからな。一度お訪ねしようしようと思ひながら、ついどうも。」
「いや、お互様だ。」

「時に、君はどつちへ行くんだい？」

「これから、家へ歸らうと思つてるところだよ。」

「ひどく急ぐのかい？」

「いや、別に……」と答へたあとで、延雄は一寸時計を出して見た。「さう急ぎはしないがね。」

「ぢや、そこいらを少し、一緒にぶらつかうぢやないか。」

斯う言つて、犬塚は食料品か何かからしい大きな重さうな紙包みを、左の手から右の手へ持ちかへながら、見附の方へずんずんと歩き出した。延雄も、一緒に歩くことの結果がどうなるかを豫想しながら、けれども割合に快活な顔をしながら歩き出した。

この犬塚は、延雄が京都にゐた時分からの友人であつた。自分で學費を作る爲めの苦しい内職仕事から、自然學生生活を窮屈がるやうな、さまざまの放縱な癖がつき、退學したともさせられたともなしに學校をはなれてしまひ、ほかの學生連中ともだんだん遠ざかつてしまつたに拘はらず、境遇の正反對な延雄とだけは不思議にも、引き続き親密に往來してゐた。そして二人が中心になつて拵へた「思想問題研究會」では、その會合の度毎に、誰よりも延雄を相手に熱烈な氣焔を上げて、とり分け人道主義對社會主義の問題に關する激論をやつて、「貴様のやうなおほつちやんに何が分る！」と罵つたり、「さう云ふ君のやうに、僻んだ目で物を見ることはまだ知らないさ」と延雄から罵り返されたりしてゐた。その

辯、さうした激論の翌日位にもう、下宿を追ひ出されたからと云つて轉け込んで來たりすると、延雄は何だか税金を取り立てられるやうな心持で、けれども堪へきれないほどの不快を感じることもなしに、いつも世話をしてやつてゐた。

太抵同時位に、二人とも東京へ來てから後は、眞赤になつて議論をし合ふ機會こそ殆んどなくなつてしまつたけれど、金策を頼みには折々やつて來た。重なる不義理に、漸く鬨を高く感じ出してからも、どつかで偶然に會へば、やつぱりお詫びをする前に、おんなじやうな相談を持ちかけるのが常だつた。その事をもうあまりに經驗しすぎてゐる延雄には、成るべく顔を合さないでゐたかつたのは勿論ながら、偕て會つて色々話してゐる内には、やつぱり他の何人と話してゐるよりも面白かつた。餘計な氣骨が折れなくて、的はづれがなくて、その上樂々と本音を吐く氣になれた。相手から自分の善良を信じられてゐるといふのも愉快であり、相手が少くとも自分に對して、或る程度を越えて不良になり得ないことをたしかめてゐるといふのも心丈夫であつた。それ故一年ぶりか、事によつたらもつと久し振りに出會つた今日も彼は、何等かの税金をとり立てられるかも知れないことを覺悟しながら、尙ほ且つあまりに素氣なく別れてしまひたくなかつたのである。

犬塚が近頃眼をわづらつてゐること、その爲めに今も眼科醫へ行つた歸りであることなどを聞いた時、延雄は言つた――

「それぢや、原稿を書くのに困るだらうね。」

「うむ。だが、その方は口で喋つて、女房に買いて貰へばいい。」

「女房？ また結婚したのかい？」

「結婚といふのかどうか知らないが、この三四ヶ月ばかり前から、まあ、一緒にゐるんだよ。」と言つて、犬塚は自分自身を嘲るやうな表情をした。

「さうか。」と言つたきり、延雄もその上をきかうとしなかつた。「だが、人に書いて貰ふんぢや、どうしてもうまく行くまいね。」

「なあに、丁度いい位なものだ。あまり書きたい事もなし、賣文の方も兎角お茶ばかり挽いてる始末だからね。」

「それもさうだらうが。」と言つて延雄も一緒に笑つた。

「ところで、僕は此頃畫家なんだぜ。繪を書いて食つてゐるんだぜ。」

「へえ！」

「いや、さう驚かしちや濟まない。ありやうは、芝居の背景描きの手傳ひさ——しかも筋肉労働の程度でね。」

「しかし君には、畫なんか描かすより……」

「小説か評論でも書かす方がましだと言ふんだらう。」

「さうぢやないか知ら？」

「あんまり明白すぎる問題だ。」と言つて、犬塚は路傍の溝へ唾を吐いた。「だが、これが世の中といふものさ。今日の社會が斯う出来てるんだから仕方がない。」

「兎に角、晝をかくんぢや、尙ほ更眼の悪いのに困るだらう。」

「實際困つてる。こつちの方だつて。」と犬塚は覆ひをかけてゐない方の眼を指しながら言つた。「あんまり健全ぢやないんだからな。」

「近頃になつて、急に悪くなつたのかい？」

「さうだ。けども、原因はもういつからとも分らない位前からのやうだ。事によつたら、僕自身の不養生よりも、両親の不養生の方に責任があるのかも知れない。」

「さうか。さう云ふ……」

「どうだい、序に一寸寄つて行かないか。僕の家は直ぐそこだが。」と言ひながら、犬塚はその顎をしゃくつて方角を示した。

「珈琲だけは炊り立ての、挽き立ての、非常に旨い奴を御馳走するぜ。」

「さうだなあ。」と言つて、再び一緒に歩き出した延雄は、九段の中坂下の電車路を斜めに横ぎつて、細

い路次を二つばかりも折れ曲つて、大方行き止まりのやうな處へ連れ込まれた。そして「御仕立物——天野」といふ小さな札のかかつてゐる格子戸の外から、犬塚は大きく怒鳴り立てた——

「只今！」

「御歸りなさい。」と言つて、一人の女が起ちながら障子をあげた。そして格子戸をもあげようとした。「お客様をつれて来たんだよ。」と言つて、犬塚は例の顎をしやくつて見せた。さう云はれてはじめて延雄のゐることに氣付いた女は、あけかけた格子戸を其儘にして置いて奥へはひつた。

それから奥の方で、もう歸るとか、また来いとか云ふやうな女同志の話聲がしてゐるかと思ふと、やがて延雄の凭りかかつてゐた板塀の背に履物の音がして、彼の直ぐ横の小さな切戸があいて、そこから先程のとは別の女が姿を現はした。

「ああ、君か。歸らなくていいぢやないか。」と犬塚は言つた。

「また参ります。」と言つて、その女は犬塚へお辭儀をした。それから延雄へも一寸黙禮した。延雄はそれに黙禮を返したあとで、どつかで見たことのあるやうな女だと思つた。

體の割に小さい凹面的な顔で、とり分け口の小さい、そしてあまり若くもなさうなのに、どつか子供々々したところのある其女は、バックを提げた左の手で、その小さい口の邊をかくすやうな様子をしてながら、延雄へとも犬塚へともなく再び軽くお辭儀をして、バタバタと駆け出すやうに路地を出て行つ

何

何時何處で彼女に會つたのか、彼女がそもそも誰であつたのかといふやうなことを、無益に矢張考へ続けながら、犬塚に導かれて其の切戸から、二坪ばかりの狭い、日當りの悪い庭へはひり、その庭に面した六疊の間へ上り込んだ延雄は、そこで先程玄關口へのぞいた婦人——勿論犬塚の細君だらうと思つた——をも仲間に入れて、天氣の話や、流感の話や、隠亡の話や、汚穢屋が來なくて困る話などの御相手をした。そして「非常に旨しい珈琲」なるものをも呑んだあとで、はじめて其の婦人へ紹介された。「これは水上さんと云つて——今は緒形か……〇〇〇大學の先生で、エライ人なんだ。」と犬塚は言つた。「それから此のレディーは僕の女房であると共に、未來劇場の夏山緑さんと云ふ女優——さんだ。」それから彼が、未來劇場と云ふ小さな新劇團へ、職業上の關係からでなく、眞面目な醉興から仲間はひつてゐることなどをきいてゐる内に、延雄はふと、さきほどの口の小さい婦人が誰であつたかを思ひ浮んだ。

彼女は、彼が實際に會つたのではなく、ただ寫眞版で見たばかりの婦人であつた。妻の瓊子が「クララ・ミリツチ」の譯本の中にはさんでゐた、雑誌か何かからの切りぬきで見たばかりの婦人であつた。

「それぢや、さつきの何も……」と突然に言ひ出して、延雄は夏山緑の方へ顔をねぢむけた。「さつきの人も矢張り、未來劇場の人ですか？」

「ええ。」と縁は、急いで吸ひ込んだ煙草の煙にむせながら答へた。

「そして何と云ふ？」

「花房——柳——子さん。」と矢張りむせながら答へた。

「一體どう云ふ婦人なんだい。」と延雄は、再び犬塚の方へ向き直つた。「さう若くもないやうだが、これまでどんな境遇にゐたのかね。」

「所謂前身かい？」

「うむ。いや、それに限らず、一體に……」

「馬鹿に熱心だね。さうまで君が御熱心なら、あいつをひとつ。」と言ひながら、犬塚は手近の机の上に載つてゐる雑誌などをかき廻し出した。「あいつをひとつ御目にかけやうよ。」

「そこに見えてるぢやありませんか。ほら、これでせう。」と言つて、縁は一冊の雑誌を取上げて、その中程の處をあげた儘延雄の前へ差し出した。

見ると其處には、「女優になるまで」と初號活字で、「その十一、花房柳子」と三號活字で見出しが出て居り、次ぎの頁には例の寫眞が！ 延雄の知つてゐる丁度あの寫眞がはひつて居つた。

一寸表紙を翻して見て、それが「婦人の世界」といふ雑誌の前月號であることをたしかめた後、延雄はその、どんな人がどれだけの責任を負ふつもりで執筆したかも分らない讀物を、むさほるやうにして

讀み出した。

それに依ると、花房柳子は本名を横田町子と云ひ、彼女の現在の言葉のアクセントにも名残をとどめてゐる如く、大和郡山在の、相應に資産もある家の一人娘として生れた。(彼女の肖像の下に掲げられてゐるのが、その村の鎮守様の實景である)。それが、彼女自身に云はせれば二十七年乃至三十七年前の事であり、口の悪い彼女の仲間に云はせれば殆んど四十七年前の事である。

十七歳の時、奈良の女學校に通つてゐた彼女は、その博物館に勤めてゐた一人の青年と戀に落ちた。けれども彼等の周圍は結局それを承認してくれなかつた。そして其の戀が熱烈であつただけそれだけ、其の失戀は彼女にまで終世癒されることのない痛手であつた。

自暴自棄からの長い放浪生活をしてゐる内、ふと故郷がなつかしくなり、四年振りか五年振りに歸つて見ると、親一人子一人であつた其父も、彼女同様の自暴自棄な生活をして、その家産をも蕩盡して、一年ばかり前に腦溢血の爲めとやらでもうあの世の人になつてゐた。

それから後の身輕な、けれども本當に心細い心持の彼女が、或は自分自身の爲めに、或はその時々、異性の爲めに、京城へ、大連へ、臺南の果てまでも行つて、どんなに悲しい恐ろしい日を送らせられたか、更に内地へ引き返して來て、横濱の南京街にまで來て、どんなにどんな生活させられたかは、神様をほかにして、ただ彼女自身だけが知つてゐる。

そして此二三年前までは、淺草邊のあるカフェーか何かにあるのを、音楽と劇と長たらしい原稿を書くことの好きな、裕福な一大學生に見出され、彼の後援の下に、非常に有望な女優候補生として、未來劇場の前身であるところの新藝術協會へ紹介されたと言ふのである。

——読み終つて、延雄は軽い失望を経験させられた。彼の謎を釋く爲めの手掛らしい何物をも、その見中に出すことが出来なかつたからである。瓊子が何故にあの二の寫真などを切りぬいて保存してゐたか、何故にそれを彼から知られることを欲しなかつたかは、依然として不可思議だつたからである。

「貴女は餘程この人とお親しいんですか？」と彼は、雜誌を机の上へ返して置きながら縁へたづねた。「ええ、誰よりも。」と彼女は、前齒の間につめた金を見せながら、彼女等の間に珍らしくない、裝はれたあどけなさで彼に答へた。「あの人位好きな人ないわ。」

「うふふ……」と犬塚は笑ひ出した。「馬が合ふんだね。所謂「女優になるまで」が似たり寄つたりだからね。」

「さう仰しやる貴方だつて、餘り立派な——」

「その大學生と云ふのを」と言つて、延雄は縁の言葉を遮ぎつた。「あの女優の後援者といふのを、君達は知つてるのかい？」

「後援者？ うむ、兎に角あれでも柄相應なメトロロンが、あとからあとから出來て來るから妙だよ。」

「さうか。」

「もつとも、最近は何れも孤立無援の姿らしいがね。何なら此際君もひとつ、大に後援してやつてくれな

いか。」
「それで思ひ出したんだけど、ねえ、貴方、柳子さんの總見のあれを御願ひして見ちやどうでせう？」
「うむ、さうさう。二三枚……なあに、うちにある位みんな引き受けて貰はうよ。」

斯う言つて犬塚が持ち出させた、柳子の爲めの總見の切符十枚を、延雄はわけもなく押しつけられてしまつた。一には、彼女に就いてあんなにも熱心に、色々の事を穿鑿した後であつたから、また一には、彼女に對する興味をまだだま多分にもたされてゐたからである。

夕方家へ歸つて服を脱ぎかへる時、それを手傳つてくれてゐる瓊子へ延雄は言つた——

「あの寫眞の實物に、御本尊に會つて來たよ。」

「寫眞？」と言つて彼女は、彼の襟帯に手をかけた儘彼の顔を見上げた。かと思ふと、忽ち一のシヨツクを感じたらしく、その手を落し、その目を伏せた。

「お前がいつか切りぬいてゐた——あれさ。花房柳子といふんだね。」

「ええ。たしかさうでした。」

彼女の指端の震へはいつまでも止まなかつた。そしてそれを見ている内に、殆んど自分自身を制しきれないほどに疑ひ深くなつた彼は、その平生にも似合はない荒々しい調子で問ひつめた——

「一體何だつて、あんな女優の寫真なんか切りぬいたんだ？ 可笑しいぢやないか？」

「別に、何ですけれど……ただ、あんまり、退屈でしたから。」

「お前は、これまでなんにも、隠し立てをしたことはないね。お前の言ふことは、みんな信じてゐていいね？」

彼が斯う言つた途端に、とり外されたカラーがかたりと下へ落ちた。それと殆んど同時に、崩折れるやうに其處へ跪づいた彼女は、無意識にそのカラーを膝の上へ拾ひ上げて、それを小さく巻くやうにしながら頭を垂れた。そして其頬が眞蒼になつてゐるやうに延雄には思はれた。

けれども彼が、瓊子の答へを待ち遠しがつて、重ねて何かを言はうとしてゐた時、彼はその室の直ぐ前の縁側を通る姑らしい人の足音をきいた。その後から、「お祖母ちやま、お祖母ちやま」と言ひながら追つかけて行くらしい照子の聲をもきいた。そして俄に冷靜な心持に歸りながら、脱ぎ棄てた上着のポケットをさぐつて、例の切符を取出して、その一枚を瓊子の前へ置いた。

「犬塚——犬塚良策の處でね、押つけられて來たんだが……」

彼女はその札に注いだ目を、彼の手元の方へ移して、五枚も七枚も、ことに依つたらそれ以上もある

らしい澤山の札をぢつと見守つた。そして彼が犬塚に出會つたといふこと、犬塚の家で柳子を一瞥したといふこと、寫眞の出てる雑誌を見せて貰つたといふこと、そんな事が引つかりになつて、到頭彼女の爲めの總見の札を引受けねばならなかつたといふこと、ついでには彼女も一緒に見物してやる氣はないかといふことなどを、努めておだやかな調子になつてゐる延雄の口から聞いた後、彼女自身も精一杯の落ちつきをもつて、やつと口をきき出した——

「お伴をすれば宜しいんですけれど、近頃なんですか、あんな場所へ行くと、お頭がやめて來るものですか。」

「もつとも、無理に行かなくなつていいんだがね。」

「茂ちゃん達は、行くかも知れませんか。」

「うむ。」

二十七、二十八、二十九と三日間、××座で一幕物の創作と四幕物の翻譯とを上演した未來劇場の芝居を、延雄が觀に行つたのは二日目であつた。生憎ひどい雨降りで、大抵來る筈だつた茂達二人も來ず、そのほかの延雄から札を贈られた人達もつひに來なかつた。

ただ一の情勢があるだけで、殆んど何等の進行も展開もない、餘りに新らし過ぎるやうな其創作劇で

は、始めから終りまで一人の老女が、大きな舊い圍爐裏のそばで、今時めづらしい絨曳車を廻はしながら、こくりこくりと坐睡りをして居り、その老女とその舊い圍爐裏とを見棄てて、どこへも行くことの勇氣をもたない若夫婦が、偶ま泊り合せたセンチメンタルな青年音楽者から、ヴィオリンのやうな音を出すギイターを聞かされたり、運命の呪咀や放浪の讀美に合槌を打たされたりしてゐた。そして最後に鶏が鳴いて、夫婦の者が音楽者を外へ送り出して、雪の上を滑り出したその鈴が聞えるところで、恐ろしくゆるゆると幕が下された。

その老女になつた花房柳子は、ただ絨曳車を廻したり、こくりこくりと居睡りをしたりするだけで、脚本の指定に従つたのか、舞臺監督からしつけられたのか、全然耳の聞えない人間のやうに若い人達の會話に無關心で居り、全然口の利けない人間のやうに、獨語をさへ、寢言をさへ言はないでゐた。

四幕物の翻譯劇は、シェキスピアの「ハムレット」の時代を十九世紀末にし、王族をブルヂョアにし、オフィリアを小都會の一娼婦にしたやうなものであつた。そして普通の處女よりも處女らしさを保存してゐるといふオフィリアの、三人の朋輩の一人に柳子があつてゐた。

彼女がぐいぐいと強い酒をあふりながら、さんざ泣きごとを言つたり、思ひ出したやうに自分で自分を笑つたりしたあとで、いきなり寢椅子の上へ倒れてしまつた時、延雄の直ぐ背後から見物してゐた一人の婦人は、その連れの人にささやいた――

「まだしも、此人の方がましぢやないかしら――あの、狂人になつて、歌をうたつたりなんかする役は。」
「さあ。」と連れの人は氣の乗らないらしい返事をした。

「でも、あの子供々々した顔が、何だか――」
折柄舞臺の方に聲高な騒ぎが持ち上つた爲めに、延雄は背後の婦人達のその上の對話をきくことが出来なくなつた。

芝居が濟んでから、延雄が犬塚と共に劇場の近くのカフェーへ行つて、彼の細君の來るのを待つてゐると、二十分ばかりして彼女は、柳子を連れてやつて來た。延雄は彼女へ、彼女は彼へ改めて紹介された。
「水上君は、大に君を」と言つて犬塚は、あまり飲んではいけないと言はれてゐる牛スキイの杯を一す管めた。「大に君を後援しようと言つてゐるんだが、どうだらう？」

「どうか、何分とも宜しく。」
「何分とも宜しく――か。拙い臺詞だね。さつきの一幕物の拙さ加減が感染したのかな。」

「お止しなさいよ――そんな惡口は。」と細君の縁は、衝立のむかふをのぞくやうにしながら言つた。
「でも、さうぢやないか。僕が柳子君なら斯う言ふね――私も、景氣のいいバトロンを一人二人ほしい所ですから、どうか御遠慮なくつてね。」

「ぢや、さう言ひ直すわ。私も、景氣の好い……好いバトロンを……持つて――」

斯う言つてゐる中に彼女自身が先づ可笑しくなり、縁も、犬塚も、延雄までも遂に吹き出してしまつた。

皆と一緒に笑ひながらも、延雄は柳子の言葉にどつか上方らしいアクセントの抜けきらないでゐることや、彼女の小さな口の邊と凹面的な顔とが、その前見た時より一層老けても見え、同時に一層子供らしくも見えてゐることなどを考へた。

間もなく、未來劇場主事の某といふのが、犬塚をたづねてやつて來たので、延雄はそれへも紹介された。彼が本職以上に劇の精通者であり、優秀なる翻譯者である由を、犬塚から大袈裟に説明された時、主事は一遍忘れられてゐた事が再び思ひ出されるやうな顔をしながら聞いてゐた。

それから十日ばかり後の事である。重ねて念入りに診察して貰つた結果、肺炎に幾分の故障のあることを言明された瓊子は、暫くの間を相州片瀬へ轉地して見る事になつた。

片瀬には丁度、彼女の伯母——そして喬の母——とその良人とが住んでゐた。彼等は二三年前に、彼が謝恩的に俸給を拂はれてゐた會社の、社長の娘さんの世話をしかたがたやつて來たのであつた。社長の先妻の腹に出來た、二十二になるその娘さんといふのは、東京の學校に通つてゐる中に體を悪くし、東京から直ぐにそこへ來たのであつたが、此の年の三月中旬にたうとう亡くなつた。けれども喬の両親

は、二三年も住み慣れた其海岸を、餘りに思ひ切よく引上げかねて、まだ其儘に暮してゐたのである。そこで、彼等と老嫌との三人で新しく借りてくれた家へ、或る土曜日の午後、瓊子は延雄に連れられてやつて來た。

そして翌日の晝間一杯を一緒にゐた延雄は、これから日曜日毎に見舞ひに來るといふことの約束をして置いて、夕方に東京の家へ引返した。

儲て歸つて見ると、二時間ばかりも前から犬塚良策が來て待つてゐた。その用事は、延雄が近頃獨逸譯を通して重譯して、或る雜誌に連載したところの「ヘダ・ガブラア」を、未來劇場でやらして貰ひたいと云ふのである。

延雄はそれを承諾すると共に、道樂半分にその舞臺監督をも手傳つてやることになつた。そして學校からの歸りなどに、折々稽古を見に行つてゐる内に、彼が柳子ともかなり親しくなつたのは、改めて言ふまでもないことであらう。

柳子の役は、ヘダと對照的な地位に置かれてゐるテアであつた。延雄もそれをかなりに適役であると思ひ、彼女自身も、これまで滅多にない好い役がついたものとして悦んでゐた。そしてそれを羨望の目で見た他の女優などは、柳子の好運を延雄と云ふ有力者との特殊な關係に基づいてゐるやうに言つてゐた。加之、利口な主事等のあの脚本を選定したのが、そもそも柳子を通して延雄を利用する爲めらしい

とさへ言つてゐた。

兎もあれ、六月下旬、二日間を或る小劇場に上演して、相應の興行成績をも挙げたらしく見えたに拘はらず、芝居道の實際に通じてゐない延雄へは、意外に多額の支出を要したので、結局六七百圓ばかりの缺損を生じたと云ふことにして報告された。

そして其責任の聊かをも延雄に嫁するのでないと云ふ口の下から、犬塚と犬塚を通じての劇場主事とは、その善後策に就いての「善い智慧」を、延雄の處へ借りて来た。

延雄の貸し得る智慧としては勿論、主事等の提案通り、五百圓の借用證に彼自身連帯保證の印をついてやる位よりほかに、何もあらう筈がなかつた。

彼は、さうして造られる金が、實際どんな用途にあてられるのかを知らなかつた。さうまでして其劇團との關係を密接にしようなどは尙更考へなかつた。けれども、犬塚といふ漢を相手にして金の談をする場合、いつも弱者の地位にばかり置かれて来た彼は、この時も、それ位の信用を貸してやれないとはどうしても言ひ得なかつたのである。

借て、翌々日の晩に向島の或る家で開かれた、未來劇場の慰勞會の歸りに、延雄は二三丁ばかり来たところで、犬塚と柳子との二人に追付かれた。そして三人一緒になつたや否や、犬塚は忘物をして来たと言つてあとへ引き返した。

それきり、いくら待つても来さうにない彼を持ちあぐんだらしく、柳子は喫みさしの煙草を水へ投げて、土手下から射して来るかすかな光に、腕時計をすかして見ながら言つた――

「いくら待つても駄目ですね。」

「さあ」と言つて、延雄はもう一度土手のむかふを見極めるやうに見た。「どしたのかなあ」

「忘物つて、何を忘れたんだか。」

「え？」

「今日は、縁さんがゐないから、きつとどつかへ忘れて置いたものを……思ひ出したんだわ。」

「さうか。」と言つて延雄も苦笑した。

「行きますよ――おそくなるから。」

斯う言つて彼女は、彼がはじめて會つた時のやうに、左の手に提げたバックで小さな口の邊をかくすやうな様子をしながら、小さな頭をかしげて彼を促した。それは子供が大人へ何物を強請るとき態度を想はせた。そして、いつの間にかもう彼の足も動き出してゐた。

けれども、吾妻橋のむかふの電車の停留所まで来て、その明るい光に、白粉の拭ひ取られた凹面的な彼女の顔を見た時、彼は自分ながら餘りに思切りよく犬塚を打つちやつて来たやうに感じ出した。あの葉櫻の下と一緒に歩きながら、向岸の灯を非常に美しいもののやうに思つたり、もつともつと土手の

上を歩き滑りたいやうに思つたりしたこと、電車を下りてから、彼女の家までの道筋をたづねたり、その寂しいところを見送らうと約束したりしたことなども悔いられた。

そこで彼は、彼一人だけでも、もう二三十分そこに犬塚を待つて見やうと言ひ出した。そして彼女が電車を下りてからの道を不安に思ふならば、先づ犬塚の家へよつて、あそこの小母さん（犬塚等に奥の二室を貸してゐる、そして「御仕立物」を内職にしてゐる後家さんの事である）にでも送つて貰つたらどうかとすすめて見た。

柳子はそれを聞いて、かすかに太息を漏らしたあとで、殆んど表情のないやうな早口で、自分も兎に角もう少し待つて見ようと言つた。

延雄も詮方なく、さうして一緒に待つてゐる内に、柳子は電柱に凭りかかつて、例のバックを提げた左の手に脇腹を押へながら、急に何だかお腹が痛み出したから、直ぐに歸りたいと言ひ出した。

それが本當か知らとは、延雄にも疑はれた。けれども本當でないとしたら、さうまでして彼に送つて貰ひたい彼女の希望を、無下に蹂躪してしまふべく、彼は十分に心強く出来てゐなかつた。と云ふよりも、これまで異性から執着されたことの経験を十分に有つてゐなかつた。

擲て彼と一緒に電車に乗つて、一緒に九段の上で下りて、招魂社の前から法政大學の横手をぬけて、彼女の二階を借りてゐる小さな荒物屋まで彼女を送つて行つた時、もう十一時をも過ぎてゐたので、階

下の老夫婦は戸口をしめて寝んでゐた。

延雄まで柳子を手傳つて、戸を叩いたり大きな聲をしたりして、やつと耳の遠いといふお婆さんに起き、貰ふことが出来た。近くの學校に小使を勤めてゐるお爺さんは、此日學校の御祝か何かがあつて、その馳走をいただき過ぎて、宵の口からねてしまつてゐることだつた。

兎も角も、加減が悪いといふのを連れ歸つたのである以上、直ぐに歸つてしまふのも悪いやうに考へて、また無意識的には、彼女の生活を序にもう少し見て行きたいといふやうな好奇心も働いて、彼は彼女のあとから、恐ろしく狭い、そして浅い階段を、文字通り上へ攀ちて行つた。

それでも二階へ上つて見ると、寄付の三疊も、奥の八疊も、延雄が豫想したほどにむさくるしくなかつた。加之、立派な箆笥や、姿見や、長火鉢や、衣桁や、彼が今敷かされてゐる座蒲團などを見ると、彼女が少くともつい近頃まで、犬塚などとはすつとまじな生活をしてゐたものやうにさへ思はれた。

「蒸しますね——少し。」と言つて、彼女は一枚分だけ障子と兩戸とを引きあげた。それから羽織の紐を解いたところで、はじめて氣が附いたらしく彼へもすすめた——

「如何です——先生も御脱りになりませんか？」
「さうですね。」

斯う言つたあとで延雄は、「いや、直ぐにお眠するんですから。」とでも言ふべきであつたと思つた。

柳子は重ねて羽織を脱ることをすすめながら、隣の三疊へはひつて行つて電燈をともし、引き返して来てこちらの電燈を消してしまつた。延雄と彼女の坐つてゐた處との間へは、隣室からの光が程よく射して来た。

「いいでせう——この方が。」と言ひながら彼女が坐つた時、彼は矢張り暗くされたやうに感じた。そして彼女との距りをより近く、嗅覺の刺戟をより抵抗しがたく感じながら、彼女にも彼自身にも本當の興味のないやうな世間話を、暫くの間つづけたあとで、不意に氣がついたやうに問ひたづねた——

「御腹は？ 矢張痛みますか？」

「いいえ。」と言つたあとで、彼女はお茶をいれかけてゐた手を休めて、今坐り直されたばかりの彼の膝頭をぢつと見入つた。

「御蔭様で大抵もう宜しいんですけれど。」

「御寢みになつた方がいいでせう。」と言つて彼は時計を取り出した。「おや、とまつたな。」

「宜しいぢやありませんか——ごゆつくりなすつても。」と言ひながら、それでも彼女は手首を光の中へ差し出して、時計の針をすかして見てゐた。

「幾時です？」

「十一時……四十……五分……」

「ぢや、大急ぎで……」

「電車なら……電車はありますか知ら。」

「十五分前でせう？——十二時に。」

「これが合つてればね。だけど、事によつたら、少し後れてゐるかも知れないわ。」

早口に、そしてかなりぞんざいな口を利くやうになりながら、出来れば電車の事なんぞあきらめさして、腰を落ちつけさしてしまはうと、熱心に努力してゐるらしい彼女を見て、延雄は吾妻橋のそばの停留所で、彼女の腹痛を訴へ出した時に経験したのと、丁度同じやうな心持を経験させられた。

「きつともうありませんわ。さつきから、ちつとも音が聞えなんいですもの。」

「困つたなあ。」

軽く舌打ちしたあとで、斯う言ひながら彼は再び膝を崩した。そして新しく煙草を口に啣へて、茶籠筒の中に何か旨い物をでも捜してゐるらしい柳子の後姿から、明け放された雨戸の方へ其目を移した。戸外には、いつの間にか月が出たらしく、往來を距てた向側の家の亞鉛屋根を、明るく眞白く浮き上らせてゐた。それが幾日頃の月か知らと思つて見た彼は、やがて此前の日曜の晩に、片瀬から歸りの汽車の中で、満月をすぎて間もない月を見たことを思ひ浮んだ。そしてそれからの聯想は、彼が明朝早々にまた病人を見舞ひに行く筈であつたことを思ひ出させないでゐなかつた。

彼が瓊子の痛々しく瘦せた肩先を心の目に見たり、彼女が力なげに咳いてゐるのを心の耳に聞いたりしてゐた時、柳子は唐突に立ち上つて、戸口の處へ駆けて行つた。

「何方？ 犬塚さん？」

「ああ。」

「御上んなさいな。下は開いてるのよ。」

「まだ臥ないでゐたのかい？」

「ええ。」と言つて、柳子は彼女の横へ来て立つてゐる延雄を顧みた。「水上先生もゐらつしやるの。」

「さうか。」と言つて家の中へはひり、無遠慮な音を立てながら二階へ上つて来た犬塚は、二人と別れてから更に何處かで飲んだらしく、だいぶ危い足許になつてゐた。「君達は甚だ以て宜しくないぜ。」

「あら、どうして？」

「すつかり置いてきほりにしたぢやないか。」

「置いてきほりにされたのはどつちだか。」と延雄も笑ひながら席を譲つた。

「さうよ、全く。」

「はッは、すつかり攻守同盟を結んだらしいね」

「それや結ぶわ。さうしないぢやゐられないんだもの。」

「なに、さうしないぢやゐられないつて！ これやどうも、熾なりと言ふべしだね。だが先刻は、お二人つきりにしちや、聊かお静か過ぎましたな。」

「随分ね——此の人は。」

斯う言つて彼女は犬塚を打つ眞似をしたけれども、彼女の目は延雄の顔にばかり注がれてゐた。延雄は、犬塚のああした冗談を少しでも悦んでゐるやうに見られたくなかつた。さればとて、餘りに不快に感じてゐるとも見られたくなかつた。そこで、全然別の事をでも考へてゐたかの如く、出来るだけ表情のない顔をしつづけようと努めてゐた。

花房柳子の處を出た二人は、次第に澄んで来た月光を浴びながら、見附外の停留所まで一緒に来た。

その或る屋臺店へ、犬塚はいきなり首を突込んで、有無を云はさず延雄をも引き入れようとした。

「まだ、飲むのかい？」

「うむ。君だつて、もうおそくなり序ぢやないか。それに何だ、たまにはプロレタリアのお附合ひもして見るものだよ。」

「しようがないなあ。」

斯う言ひながら延雄も、首をちぢめるやうにしてカアテンをくぐつて見ると、中は思つたほどにもき

たなくなかつた。そしてその主人とも顔馴染らしく快活な無駄口を叩き叩き、瞬く間に二合壺を空からにしてしまつた犬塚は、二本目のあつくなるのを待つてゐる内に、どうした話の緒いとちからか、御得意の「補充戀愛論」をまたもや述べはじめた。

彼の「補充戀愛論」を一言にして云へば、人が第一から第二へ、第二から第三へと、次ぎ次ぎに新しい戀愛の相手へ移つて行くのは、もとより大抵の場合無意識的ながら、前の相手に依つて實現し足りなかつたところの戀愛の理想を、後の相手に依つて實現し足さうとするのである。不十分であつたところの戀愛を補充して十分なものにしよつとするのである。

ところで補充は、全然同様のものによつてなされることも出来なければ、全然異質のものによつてもなされる事が出来ない。

乃ち、一人の男子なら男子が愛着する幾人かの婦人は、それぞれには、つきりと相異なるところを有すると共に、またはつきりと相似たるところをも有しなければならぬ。

——斯うした議論を延雄はまたかと思ひながら、いい加減にあしらつてゐたのであるが、不圖次ぎの一語を犬塚の口から聞いた時は、流石にその注意力を緊張させられないでゐなかつた——

「だが、君、僕は斯うして抽象論を反復してゐる内にだね、一のすばらしい具體的實例を發見したんだぜ。」

「すばらしい……具體的實例？ それや、どう云ふんだい？」

「君自身はまだ氣がつかないのかな。」

「え？」

「君の細君には、まだほんの二三度しか會はないのだが、そして勿論、比較にもならないほど美人でもあり若くもあるが——」

「よせよ、女房の話なんぞ。」と撥ねとばすやうに言つて見たけれど、延雄は何だか、あまり無意味な話を持ち出されてゐるやうには感じられなかつた。

「どつかしら、似たところがあるやうに思ふんだ。少くとも……少くとも、その印象が似てるんだ。」

延雄には、瓊子が誰に比較されてゐるかを問ひたづねて見ることに必要がなかつた。さればとて、相手の話の意味が十分に通じたらしく挨拶するにも早過ぎた故、彼はさきほどから注いで貰つた儘に、もう飲まない積りにしてゐた洋盃の酒を、目をつぶつて、ぐつと一息に飲みほした。すると、二本目の壺が銅壺どうしから引き出された。

「御待遠様、もう出来ました。」

「どうだ、もう一つ。」と犬塚がそれを受取つて、延雄の洋盃へつがうとした。

「いや、もう十分だ。」と言つたあとで、延雄も自分自身の言葉からやつとユウモラスな調子を誘ひ出さ

れた。「何もかも、十分以上だよ。」
「十分以上？ さうか。補充戀愛論も、もう澤山だと云んふだね。はッはッは。」

犬塚をも俾くろまに乘せて歸し、自分自身も大久保までの俾くろまを一喜頼んだ延雄は、一人つきりになつた爲めに急に發して來たらしい醉を、濠端の夜の風に吹かせながら、さきほど犬塚の暗示した事柄を思ひ浮べて見た。そして、もはや若々わかわかしくもない、その辭時々、本當に子供々々した顔になるあの柳子が、柳子の印象が、どつか知ら瓊子のそれに似てゐることに、どうしてこれまで氣付かなかつたのかと考へたり、また成程犬塚がその補充戀愛論の實證にしようと試みただけあつて、彼女等が非常に相異ことなつてもゐるといふことを考へたりしてゐる内に、延雄自身も今、一のすばらしい大發見をしたやうに思つた——
「やつと分つた！」と彼は、彼自身の心にまで話しかけた。「瓊子があの寫眞を切りぬいてゐるのは、何も他の理由からぢやない。偶たままあの柳子が彼女自身に似てゐることを發見して、或は誰かにさう言はれて、その興味から、退屈凌あやぎに思ひついたり、つらに違ひない。そして彼女のあつた性質からしては、私にさへ何の爲めかを言ひかねたのに不思議もない。さうだ、單にそれだけの事だつたのだ。私は矢張り氣を廻し過ぎたのだ。」

斯う云ふ風に考へながら、だんだんと醉の發するにつれて、いよいよ上機嫌になつて來た延雄が、今

そのだるくなつて來た目蓋まぶたを閉ぢると、そこには何時いつになく晴々はればれと微笑してゐる瓊子の幻影が立つた。それを相手に「やつと分つたよ。」と言つたり、「疑つて濟まなかつたね。」と言つたりしてゐる内に、瓊子はいつの間にか延雄自身と一緒に、向島の土手の上を、葉櫻の下を歩いてゐた。と思ふと、瓊子は更に柳子になつて、しかも實際よりもすつと若々わかしく華はなやかな柳子になつて、例のバックをさけた手で、小さな口の邊をかくすやうにした……

最初の半歳あまりを片瀬に過ごしてゐた瓊子は、お醫者の方の關係やら何やらで、翌年の春、喬の兩親もろともに平塚の海岸へ移つて來た。

そして其濱邊に見る汐のさしひきのやうに、少しよかつたり又悪かつたりを、あきあきしてしまふほどに反復してゐる内、結局病勢はだいぶ重くなつて來たらしく、誰よりも彼女自身に思はれた。

とり分け、夏場の賑ひを、快活な避暑客のにぎやかに押しかけて來て呉れたのを、自分でも不思議な位、嬉しく悦ばしく思つてゐただけに、八月の末頃から三日ばかり降りつづいた、ひやひやとした雨に驚いて、それらの人達が俄かに引き上げ出した時、彼女は本當に淋しくなつた。さうして自分達の家ばかりが、どちらへ向いても空家ばかりの間、いつまでも取残されてゐなければならぬといふこと、それよりも自分一人が、永久にもう東京の土を踏むことさへ出來さうにないといふこと、ここへ來てからも已に幾人かの人々がされたやうに、自分も遠からず白い灰にされて、小さな壘にいれて持ち歸られるので

あらうといふことなどを、それからそれへと考へてゐると、精一杯堪へてゐるつもり涙が、またしても胸元へこみ上げて來て、その枕元に不自由な縫針を動かしてゐる伯母や、縁側に雑巾がけをしてゐる女中なぞの手前をも、つい忘れてしまふやうなことになる勝ちであつた。

良人の延雄は従前通り、二週間目の日曜日毎に、大抵缺かさずに訪ねて來た。彼女のそのやうな病氣に罹つた妻を、彼ほどにもいたはつてやらない良人等の、世間に随分あり得ることを考へては、瓊子はともかくも有難い事だと思つた。そして偶には、もつともつと思ひやりのある深切な良人等のあり得ることなどを、伯母達からして暗示しきかされても、彼女は延雄のほどほどな深切ぶりを不満に感ずるより、寧ろあんまりやさしくして貰ひすぎないことの氣易さを悦んでゐた。加之、彼の彼女に盡してくれるのが、だんだん形式一偏なものになつて來れば來るほど、彼との結婚の後も彼女自身のすべてを彼の物にしてしまへないことの爲め、いつも濟まない濟まないと思つてゐた感情が、幾分薄らいで行くやうにさへ見えてゐた。

東京から延雄の訪ねて來ない日曜日には、照子が祖母につれられて訪ねて來た。

照子が不幸なる彼女の母から引き分けられてゐた一年ばかりの間に、だんだんと母を要しないものになり、つひに祖母の子となりきつてしまつた——祖母はもうずつと前から、瓊子の母であるより以上に、照子の母になつてゐたのだが——といふのは、聊かも異むに足りない事であらう。

その上、二週間目にただ一度だけ會ひながら、むかしのやうに膝へ抱き上げても頼りしてもくれぬのは勿論のこと、なるべく身近に寄せつけないやうにとさへつとめてゐる彼女の母は、彼女の頑是ない心にまで、叔母の茂の三分一ほども親みのないものになつてゐた。

その茂の手を通して、あらかじめ取寄せて置いた色々の珍らしい玩具や人形などを、母の枕元で、母からの贈物として與へられるのを、たつた一の楽しみにして、でなければあまり来て見たくもない平塚なぞへ、照子は辛うじて連れ出されてゐた。そして、それらの玩具や人形などを手渡してくれる上に、色色の御馳走などもすすめてくれる『平塚のお祖母様』の方が、彼女の陰鬱な母よりも、やつぱり餘計に慕はしく思はれたのである。

それほど照子にまで親みのないものになつて來てゐることを瓊子はどんなにか淋しく思つた。さなきだに、四つや五つで別れた親の印象を、はつきり刻みつけて置くといふのはむづかしい事なのに、こんなよそよそしい關係の儘でゐて、その内に死に別れてしまつたなら、あの照子の頭に何が、本當に何が、彼女の母の記憶として残るであらう！そして其事を、大人になつてからの彼女が、どんなに口惜しく悲しく思ふであらう！

けれども、斯うした考へかたが次ぎの瞬間には、全く異つた寧ろ正対な考へかたにまで移つてゐた。即ち、照子が今でも『母様！母様！』と言つて、彼女のあとを追ひ廻してばかりゐたのならば、現

在のやうに照子から遠ざかつてゐることに、遠ざけられてゐることに、どうして彼女が堪へ得たであらう！それよりも、否それよりも、あれほど氣懸りな魂をあとに残して置いて、此世界から永久に消えて行かねばならないといふ恐ろしい運命を、どうしてあきらめることが出来たであらう！

何よりも此矛盾した二の考へかたを、瞬間毎に、取り換へ引き換へして考へながら、今日も瓊子に朝早くから、時計の針の進行が、意地悪くのろのろとしてゐるやうに見えるのを、頻りに齒がゆがつてばかりゐた。時々本當に動いてゐるかどうかを疑つて、わざわざ耳もとに寄せて見たりした。照子達が（多分は今度も茂との三人連れで）いつもの通り、十一時十分着の汽車で訪ねて來てくれる筈になつてゐたからである。

十時半になると、一寸だけ締め直して、その上に羽織を引つ掛けて、いつもの通り停車場まで迎へに出掛けようとした

『今日の見合はした方がよかありませんか。昨日の今日のですから。』

今迄女中を手傳つて、照子達への御馳走を拵へてゐた伯母は氣遣はしさに斯う言つた。斯う言はれて、昨日の夕方八度五分から七分位にまゝ昇り、かなりに苦んだことを思ひ出し、又今日はまだ一度も検温器をあてて見ないことにはじめて氣附いたのだけれど、それでも瓊子は、頑に微笑しながら言ひ張つた——『でも、別に苦しくないんですから。大丈夫です。』

「あんまり大丈夫でもなささうですがね。」

「苦しうなら、苦しくなつたら、直ぐに歸つて來ます。」

「ぢや、私も一緒に行きましょう。」と言つて、伯母も柱時計を見い見い羽織を引き出した。「まるで子供のやうな、本當にしようのない人ね。」

結局伯母と二人連れで迎へに行つてゐると、四五分ばかりの延着に、一寸彼等をじらしたあとで、照子等を載せた列車はやつて來た。停車にさきだつて茂と照子とはもう、窓から頭をのぞかせてゐた。

三人が改札口を出て來てから、瓊子は母と並んで歩き出しながらたづねた――

「御風邪は？ もうさつぱりしましたの？」

「ええ。何でもなかつたの。それよりも照ちやんが此間内、水疱瘡をしましてね。」

「さうですか。」と言ひながら、さきほど照子の顔や手首などを一瞥して變に思つたのが、成程と瓊子は自分でうなづいた。でも、よく、そんなに早く……」

「此前こちらへ來た時、少々ばかり御機嫌が悪かつたのは、やつぱりその爲めだつたらしいの。あの翌る日の午後あたりから、だいぶ熱が出て來てね、それも水疱瘡だつてことがはつきりする迄は、一寸心配しました。」

それにしても、此前延雄が來てくれた時分にはもう、水疱瘡であるといふことも知れてゐたらうに、そ

れに就いて何とも報告されなかつたことを思つて瓊子は今、延雄へとも彼女の母へともなく、軽い不満の心持をもたされなないでゐなかつた。けれどもさうした心持を、どういふ風に表白したものが、それともいつそのこと、表白せずに置いたものかなぞを思ひ迷つてゐる内に、彼女はその二三間ばかり前を、喬の母と茂とから手を引かれてゐる、といふよりも寧ろ、二人の手を引張りながら、前屈みになつてせかせかと歩いてゐる照子の、左の方の靴下のバンドが脱れて、その靴下が見苦しく落ちかかつてゐるのを見出した。

「照ちやん、一寸！」と言ひながら、彼女は思はず駈け寄らうとした。けれども、彼女自身の手を照子の體に觸つてはならないといふことに直ぐ氣附いた。

「え？ 何か仰しやつて？」

斯う言ひながら茂が背後をふり向いた。けれども瓊子は、わざわざ他人の手を煩はすほどの事でもないと思つた。そして微笑しながら言つた。「いいえ、何でもないので。ただね、照ちやんの御足があんまり速いから……」

「全くね。」と言つて、茂はその目を瓊子から照子へ移した。「あなたどうしたの？ どうしてそんなに駈け出すの？」

「そんなに駈け出して行つちや、お祖母様達も追ひ附けないんですよ。」と茂達の母も言つた。

「ああ、分つた。お小便ですな、きつと。」と言つて茂は、松林から出て松林へはひる、碌々人通りもない一筋道、後前を見廻した。『お小便なら、なさいよ。構はないから。』

「さうぢやない？ ぢや、どうしたの？ え？ え？」

と言つて、その耳を照子の口元まで持つて行つてゐた喬の母は、やがて聲を立てて笑ひながら一同へ報告した。『御飯が、食べたいんだつて！』

『まあ、いやな照子さんね。さつき汽車の中で御辨當召上つたばつかしなのに。』

『でも、おいちくなかつたもの！』

『ぢや、母様なんかあとからごゆつくりいらつしやい。私達はさきへ行つて、平塚の旨しい御馳走をたべてゐますから。』

『お祖母様もいらつちやらなくちやいや。』

そこで照子と其祖母と喬の母との三人は、瓊子を茂に託して置いて、大急ぎにさきへ行くことになつた。そして三人の姿がたんだんと遠ざかつて行つて、或る曲角の處で遂に見えなくなつてしまつた時、瓊子はそれまで肩にしてゐた洋傘をすほめて、それを杖につき出した。それも次第に引きずるやうになつて來た。やがて、兩側を砂丘に限られた、舟底のやうな、別して風通りのよくない處へさしかかると、彼女は立ちとまつて、路傍に咲き残つた晝顔や、野茨の花などをでも見守つてゐるかのやうに装ひなが

ら、その顔近く扇代りの白いハンカチーフをふり動かした。

『姉様、駄目よ。これですもの。』と言つて茂は、今取り出した小さな扇で、瓊子の足の指頭にとまつてゐた藪蚊を逐ひやつた。そして二三十間ばかりさきの大きな切株か何かを指さしながら云つた。『あすこまでいらつしやいな。あすこなら風も通りさうだから。』

『ええ。』と答へて、指ざされた方へ目を走らしただけで、瓊子は暫くその儘に立つてゐた。

『なんなら。』と言つて、茂はその姉の横へ來て、その右の手で自分の左の肩を軽く叩いて見せた。『なんなら、私の肩につかまつていらつしやい。』の意味である。

『そんなでもないわ。大丈夫よ。』と言ひながら、瓊子は再び洋傘を杖につきながら歩き出した。

『なんだか、あんまり大丈夫さうにもないぢやありませんか。ね』

斯う言つて、茂は遂に姉の手を取り上げて、それを自分の肩にかけさせた。妹の手を不思議な何れか感じて、自分自身に餘程の發熱をしてゐるらしいことを思つた瓊子は、その爲めに一層重くなつて來た足を、泥濘の中でも歩つてゐるやうに引きずりながら言つた――

『もう、駄目……らしいのね。』

『駄目？』

『ええ、さう思ふわ。』

「何が駄目なの？」と茂は、おほよそ見當のついてゐる事ながら、半ばたしなめるやうな意味から問ひ返した。

「もう、長いことなささうよ——あなた方からこんなにしていただくのも。」

「つまらない！つまらない事を仰しやるもんぢやなくつてよ。」

「それやね、こんな事はあんまり——成るべく言はないでゐたいんだけど、言はないでゐただけど、」
「言はなくなつて、考へてちや矢張おんなじ事よ。」と茂はやさしく非難した。「今からそんな事考へるのは早過ぎます。一體に姉様は取越苦勞が過ぎます。世の中の事は、いくら苦にやんだつて、つまり成るやうにしか成らないぢやありませんか。」

「全くね。成るやうにしか成らないものね。」

「ですから、もういい加減にして」と茂が言ひかけた時、彼等は二人相並んで腰をかけることの出来る位な大きな松の切株の處へ來てゐた。「ですから、もう考へることなんか止してしまつて……もうなんにも考へないことにきめてお仕舞ひなさいよ。」

「さうきめてるわ、もう」と言ひながら瓊子もかけた。「もう、なんにも考へないことにきめてるんだけれど……」

「そら、御覽なさい。矢張り考へるんでせう。」

と茂は、自分の方へよりも姉の方へ風を送りながら、再びやさしく非難した。

「だけど、あの子の事が。」と言ひさして、瓊子は忽ちその聲を吞んだ。「……氣になつて、死……死にきれないの。私ね、本當に死にたくないんですよ。」

「ですから、ですから、そんな心細い事なんかもう考へないでね。そして早く、よくなつてね。……でないと、照ちやんが可哀相ですからね。」

「だけど、茂ちやん、こんなに死にたくない人間でも、矢張死んぢまふのね！ 死ななくちやならないのね！」

「また、そんな事を……」と茂は言つたきり、そのあとへつづけるべき適當な言葉をも思ひ浮ばないで、その儘重苦しい沈黙の中へ引きすり落されながら、いたづらに瓊子の背を撫でさすつてばかりゐた時、松林のむかふからがたと音を立てて、一臺の大きな荷車が現れた。その上には東京へ引き上げて行く人の荷物らしい行李や、こも包みなどが、積み上げられるだけ積まれてゐた。

「兄様は」と茂は、荷車がその通り過ぎてしまつた時、何か別の事を話題にするつもりで言ひ出した。

「明後日からとか、學校の方がはじまるんですつてね。」

「さうですか。」と表情のない聲で答へて、瓊子は軽く咳出した。

「だけど、延雄兄様のやうな勉強家も珍らしいわね。」

「さうでせうか。」

「だつて、夏の間もずうつと講習會見たいなものがつづいて、碌々お休みもなかつたぢやありませんか。そしてこちらへも、學校のある時分とおんなじやうにしか、いらつしやれなかつたのね。」

「ええ。」と瓊子は、いよいよ表情のない聲で、殆んど器械的に茂へ答へた。
茂は、延雄が此頃その不幸なる妻に對して、あまりに冷淡らしく見えるといふことを言ふつもりやうだつた。或は單に冷淡らしく見えるといふだけでなく、それ以上の面白くない事實か風聞をでも耳にしてみても、それを報告したり、問題にしたりするつもりもなかつた。けれども瓊子が、さうした方面の話に何等の興味をも有つてくれさうにないのみならず、むしろ煩はしい位に思つてゐさうに見えたので、ともかく此場合は、いい加減に脇道へ逸らししまふことにした――

「人つてものは、みんな、それぞれに異つてるのね。」

「それや、異つてるわ。」と、瓊子は少くとも延雄の事から別の人の事に、話題が移つて行きさうなのを悦びながら言つた。

「私はね、いつでもさう思ふの。延雄兄様のやうな勉強家の、それこそ爪の垢でも煎じて呑みたい位だつて。」

「それは誰に？ 誰に呑ませるの？」と瓊子は、一寸軽いユウモアを感じながら言つた。

「あら！」と言つて茂は、きまり悪さを誤魔化す爲めと、それを機會に自分達二人をもつと快活にする爲めとで、開いた儘の扇をふり上げて、瓊子の脊を打つやうな眞似をして見せた。

「でも、四郎さんだつて、随分勉強家の方ぢやありませんか。音楽の方の事、矢張り研究してらつしやるでせう？」

「あんな事ばつかし、研究してるんだから困るわ。」

「でも、音楽は茂ちやんも御好きぢやありませんか。」

「いくら好きだつて、本業の方をすつかりお留守にするんだから困るわ。さう仰しやるわ、どなたも。」

「本業の方つて、會社へはさうつと出てらしやるんでせう？」

「ええ。だけど、その内に止すかも知れないつて、さう言つてますの。」

「まあ、どうしてでせう？」

「何ですか、近頃はいろんな、突飛な事ばつかし、あとからあとから考へ出してね、横濱の實家の方もね、自分は相續人にならないことにするんですつて。」

「まあ！ 本當なの？」

「ええ。本當に、本氣にさう言つてますの。」

それから茂は、彼女の良人の松田四郎がどうしてそんな考をもつやうになつたかについて、彼女自身

の見聞し理解してゐるほどの事を、問はれるままに詳しく話した。

そもそも、延雄の父ほどに知名でない、けれども別して此數年來、大して遜色のない位な財力を築き上げた松田の父は、彼が大學を卒業する半歳ばかり前に、彼のすぐ兄であるところの總領息子を、腸チブスの爲めに突然とられてしまった。そしてそれまで自由に職業を選択さすつもりで、文科などに通はしてゐた彼を、卒業するや否や、無理やり自家の事業の方へ關係させることにしなければならなくなつた。

その運命に一應忍従して見る氣になつた彼は、喬がたよつて行つた例の上海の支店にも、一年ばかり行つてゐた。横濱へ歸つて父の側にも二年ばかり、それから表面上會社のやうになつてゐて、事實は彼の父の専ら經營してゐる現在の處にも、かれ是れ二年近くを働いてゐた。

けれども、さうして働きながら彼は、ちつとも本氣になつて眞劍になつて働いてゐなかつた。彼自身の言葉で云へば、『いい加減に』ばかりやつてゐた。そして近頃になつて、彼自身のほかの何人からせき立てられたのでもなく、これまでのやうな不徹底を徹底さして、本當の商人になりきつてしまふか、それともいつそのこと、商人などといふ柄にない生活から綺麗に足を洗つてしまふか、二つに一の態度を決定すべく、餘儀なくされてゐるやうに考へ出した。

その上、數年來思想界の、否世間一般の流行とまでなつた資本主義經濟組織に對する、抽象的並びに

具體的の、唯物論的の並びに唯心論的の、さまざまなる研究や批判や彈劾や叫唱などは、もともとさうした方面の問題にそれほど興味をもつてゐなかつた彼にも、かなり根柢的な影響を與へないでゐなかつた。とり分け、最近に彼の先輩であるところの批評家××氏からすすめられて讀んだキリアム・モリスの物三種ばかりは、彼をして遂に資本主義社會とブルジョア文化とに對する最終の信頼を、最終の未練をも棄てしむるに至つた。

ところで、早晚自分が相續するであらう自家の財産を、所謂資本家根性からでなく、むしろ彼の新しい理想を實現する爲めに使ふのなら、強ち無意味でもあるまいと、彼も一寸は考へて見た。けれども直ぐにその考の間違つてゐることに氣がついた。なぜと云つて、ひとたび實際に大資本を左右するやうになりながら、尙ほ且つ資本家根性にならないで行くといふのは、現在の松川などに想像もつかないほど困難な事らしく、否殆んど不可能の事らしくさへ思はれたからである。

——此等の事情に關して、茂は彼女自身の見聞し理解してゐるほどの事を、問はれるままに詳しく話した。

『ぢや、それで晉吉さんに横濱の御家を繼がせると仰しやるのね。』

『ええ、さうなの。まだ自家の方へは、話しちやらないらしいけれど。』

『だけど、さういふことにしてから、四郎さん御自身はどつなさる御積り？ ——どつなさるつていふ

のも、何だか少し變な言ひかただけれど。」

『兎に角、資本で生活しないで、勞働で生活するのが第一ですつて。それでなければ、今の社會を正しく見、正しく感じ、正しく批判することが出来ないんですつて。さう言つてますわ——私なんぞには、よくは分らないんですけど。』と言つて、茂は聲を立てて笑ひ出した。

『よくは分らないつて、それでゐて、何だか香氣のんきね、貴女も。』と言つて瓊子も微笑した。『問題は矢張り、貴女御自身の問題ぢやありませんか。』

『だけど、そんなむづかしい事を考へる、柄がらでないんですもの。それに私自身の問題でも、なまなか私なんぞが下手へたに考へるより——』

斯う言つてゐる内に、茂はその次ぎを言ひ續けにくいことに氣が附いた。なぜと云つて、彼女の松田に對してもつてゐるやうな絶對的信賴を、その不幸な姉を前にしてその儘に表白することが、何とはなしに憚られたからである。そして格別の意味をもなさない位な言葉に言ひ濁してしまつた。『私なんぞ、考へたつて考へなくなつて、おんなじですわ。どのみち分りつこないんですもの。』

敏感な瓊子は勿論、妹が何を言ひ出しながら途中で言ひ濁してしまつたかを、明白に直覺しないではなかつた。そしてそんなにまでいたはられねばならない自分自身を考へて、つい滑すべり込んだ沈黙の淵から、直ぐにははひ上ることも出来ないでゐた。

『まあ、いやな犬!』

斯う言つた茂の聲に、瓊子も今迄伏せてゐた目を舉げて見ると、一寸日本種らしい毛並けなみの、けれども耳の長く垂れた可愛らしい一頭いっぴきの小犬が、茂の膝に寄せかけた洋傘のさきを、頻りに鼻を鳴らしながら嗅いでゐた。

『いやな犬ね。もうお止し。』と言つて、笑ひながら茂は洋傘を引き寄せた。『私達は、泥棒でも何でもないわよ。』

小犬は、その洋傘で打たれるかも知れないことを恐れる代りに、ぐるりと一遍廻つて見た後、その後脚を折り敷いてそこへ蹲うづくま居り、赤い舌を長く垂れながら、『はッ、はッ』と著つうな息を吐き出した。そして折々、二人の婦人の間を通して、ずつと向ふの方にある、仲間の犬が主人なぞへ目示めくはせをでもするやうな様子を見せた。

その事に氣附いて徐しゆかに背後うしろをふり返つた瓊子は、彼女から十間ばかりを距てた處に、一の不可思議なる、意外極まる幻影を見出した。そして直ぐに、弾はじき飛ばされたやうに面おもてを背けた。

しかし、閉ぢ塞がれた彼女の目からも、一瞥の間に刻みつけられた幻影の印象は消え去らなかつた。そして其幻影が單なる幻影にすぎなかつたかどうかをたしかめることの勇氣をもたない彼女が、大浪の揺ゆらぐやうに鼓動しはじめた胸部を押へながら、その病熱と感動とに燃えあがりさうな全身を、その全

身を悉く耳にしてゐた時に、一の聲は聞えて来た——

「茂ちゃん！」

けれども、直ぐに仲好しになつてくれた小犬をもてなすべく、照子が汽車の中で食べ残したビスケットの包みを、その手提てさびの中に捜してゐた茂は、斯うして自分の名前を呼びかけられたことにも、またそれがどんなに彼女の姉を壓倒し去つたかといふことにも、全然氣附かないでゐた。

「おい、茂ちゃん！」と、さきほどの聲が再び呼びかけた。

はじめ、誰かがどつからか、自分の名前を呼び立てたやうに思つた茂は、その手にビスケットの二片きれを握つた儘、先づその姉の方へ目を走らしたが、そこに自分の空耳そらみみでなかつたことをたしかめられて、瓊子のさきほどしたやうに背後うしろをふり向いて見た時、彼女もまた、高度の電流にでも觸れたかのごとき衝撃しよつを受けた。

「分らない？ 僕だよ。」

それまで或る松の木の根もとにしやがんでゐた、浴衣掛ゆかたかけの一人の青年——といふよりも寧ろ中年といひたい位な——は、斯う言ひながら起ち上つて、鍔つばの廣い經木けいぎの帽ぼうを脱つて見せた。

「まあ！ 喬さん！」と呼んだ茂は、いつの間にか起ち上り、いつの間にか歩き出してゐた足を踏み止まつて、瓊子の方へふり向いた。「喬さんなのよ！」

瓊子が其時どうしてゐたか、それからどつしたか、喬がいつの間にも彼女の方へ近寄つて来たか、これらの事は彼等にさへ殆んど意識されなかつた。そして稍やはつきりした各目めいめいの自己に歸つて見ると、彼女はさきほどの切株から僅かに二三歩を離れた處に、左の手を茂の肩にかけ、右の手を小さな松の枯枝につかまりながら、喬の頭の上の、すつと高いところへ目をやつてゐた。喬は折り疊んだ帽子で風を起しながら、茂と正面に向き合つて立つて居た。

「あれつきり……もう、あれつきり……とばかり、お、患おほつてゐましたわ。」と茂は吃りどもり言つた。

「二度ともう、お目にかかれるどころか……」

喬はその帽子を揺り動かすことを暫くやめて、激しくまばたきしながら唇を嘗めた。そして何かを言はないではゐられないやうに思ひながら、なんにも言ふことが出来ないのであるもののやうに見えた。瓊子は、つかまつてゐた小さな枯枝を折りすてて、次第にその全身の重みを茂の方へもたせかけて行つた。

「私、何からさきへお話ししたらいいか……何がなんだか。」と再び茂が言つた。

「僕も、僕もね——」

「突然ですもの。それに、あんまり久しく、會はないでゐたんですもの。」

茂の斯うした言葉さへ、つひにおろおろ聲になつてしまつた時、喬は面をそむけて再びその唇を嘗め出した。そして何かを言はうとあせればあせるほど、いよいよ何から言つていいか分らないらしかつ

た。

「喬さんはなぜ、私に……いいえ、それから後でもなぜあんな——」

「いや、過ぎ去つた、あんまりふるい話はよさう。お互によさうよ」と喬が早口に遮ぎつた。「つまらない！、それに何だ、僕はもう、大抵忘れてしまつた！」

「だけど——」

「いや、本當に止してくれたまへ。僕は斯うして……君達に會つて、君達が現在どうしてるかつてことを、見たり聞いたりすれば、そして何なら僕自身の現在の事も話したければ、ただもう、それだけでいいんだ。それだけの事をさへ、どんなに躊躇したか分らない位だからな」

「たけど……」と言ひさして、茂はその姉の顔をのぞき込んで見た。瓊子は目をつぶり口を結んだ儘、頭を横にふりながら、片手を舉げて拜むやうな恰好した。それが、喬の要求してゐる通り、餘計な話を持ち出さないやうにしてくれの意味であることは、たやすく茂へも理解された。そこで彼女は言ひ直した。「たけど、伯母さんや伯父さん達も、どんなに喬さんの事を心配して……喬さん御自身は御存じなかつたでせうけれど。」

「うむ。いや、それもさうだらう——」

「もう御會ひになつて？」

「うむ。一寸その何だ。先刻よそながら。」

「さう。」

「僕は、もつとひどい年寄になつてゐると思つてゐた。」

「伯母さんはさうですが、伯父さんは、近頃滅切……まだ御會ひにならないでせう？」

「うむ。だが昨夕も、今朝も、あの聲だけは聞いたよ。」と言つて、喬ははじめて微笑した。「不相變いたづらに熱心な聲を張り上げてゐるらしいね。」

「兎に角、こんな處でお話も……何ですから。」と茂が、はじめて氣がついたやうに言ひ出した。

「だが、まあ待つてくれたまへ。年寄連に會ふのは、無論會ふには會ふつもりだが、もう少し君達と話してからにしたいんだ。その爲めに、斯う云ふ機會をとらへる爲めに、一昨日のお晝過ぎから今迄、いたづらにごろごろしながら、待つてたんだからね。」

「一昨日のお晝過ぎから……さうですか。」

「いきなり飛び込んで行くのは、何だか氣が咎めてね。つまり年寄連に會ひに来た序に、その序に……瓊ちゃんなどにも會ふんだといふ、男らしくもない言譯になりさうだからさ。」

「兎に角、私は先きに行つて、お知らせして置くわ。」と言ひながら、茂はその姉をきほどの切株の處へ連れて行かうとした。

「だけど、茂ちゃん、貴女が行つちまふと、なんだか……困るわ。」と言ひながら、瓊子はそれでも切株へかけることだけはおとなしくかけた。

「僕も困るよ。本當に困るんだよ。」

「でも。」と言ひさして、茂は喬と瓊子とを半分々々に見た。「でも……」

「本當に困るんだよ。二人つきりで話すやうな事は、なんにもないんだから！」

さう言はれながらも茂は、だいぶ暫く剃刀をあてないらしい禍世にやけた喬の顔と、折々軽く咳きながら背向きになつてゐる瓊子の姿とを、矢張り半分々々に見比べながら、黙つてそこに立つてゐた。

「だが、瓊ちゃんの病氣は」と言つて、喬は彼女のそばに歩み寄つた。「病氣はそんなに悪くもないやうだね。」

「いいえ、駄目ですよ、もう」

淋しげに微笑した顔をふり向けながら斯う言つたあと、瓊子はその洋傘を杖に、片手を切株について起ち上らうとした。喬に席を譲らうとしたのである。

「いいよ、いいよ」と、帽子で彼女の肩を押へるやうにしながら言つて、彼は彼女とはすかひに、木の根が岩のやうに持ち上つてゐるところへ腰を下ろした。そして其帽子で風を起しながら再び言ひ出した。「その様子ぢやまだまだ……そんなに心配しないでいいが、僕はね、もつともつと悪いやうに聞いて

るんだよ。」

「その御足は、どうかなすつたの？」と瓊子は、彼の左の足の繻帯に氣付いてたづねた。

「これか。水の中で、貝殻か何かで切つたらしいんだ。何でもないよ。」

「姉さんの御病氣の事なんぞ、御存じだつたの？——喬さんは」

「うむ。知らない方がよかつたかも知れないがね。」と、自分で自分を嘲笑するやうな調子で喬が答へた、

「十日ばかり前に、偶然いろんな事をきいたんだ。」

「十日ばかり前に？ さうですか」と言ひながら、茂はちつと考へ込んだ。

「だが、おんなじ聞くなら、もう少し、たしかな事を聞いとけばよかつたと思ふよ……結局愚痴だがね。」

「第一、なんだ。瓊ちゃんかね」と言ひさして喬は一寸躊躇した。けれども、總てをもう豫覺し直視してしまつたらしい瓊子の緊張した表情は、その躊躇の恐らくは無用であらうことを彼に思はせた。「瓊ちゃんが、旦那様と別々になつて、一人ほつちで此處へ來てゐるつてことをだね、その意味をとり違へてたんだ」

「まあ」と茂は、單純に驚いたらしく叫んだ。

「その上、病氣を非常に悪いやうにきいたんでね、つまり、さうした誤解が僕を、何だ……二度ともう

何しないつもりを僕を」と言つてゐる内に彼は、またもや自分自身を嘲笑するやうな氣分に陥つた。「いや、そんな話は面白くない！ よさう。」

「あら。よさなくなつて、よさなくなつていいことよ。」

「それよりも、茂ちやんは」と言つて、彼は茂の近頃やつと自分でも好きになれた丸髭を、物珍らしさうに見守つた。「すつかり別の人間みたいになつたんだね。」

それから彼は、彼が彼女と松田との幸福な結婚についても詳しく聞いてゐたといふこと、そして聞いてゐた通りならば、何よりも芽出度いといふこと、尙ほ今晚茂と一緒に東京へ出て、松田にも會ふつもりであるといふことなどを話した。そしてそのあとで、いつの間にか涙に光つてゐるその目をしばたきながら再び繰返した。「全く、君一人で歩つてるところをでも見たんぢや、一寸、茂ちやんだつてことは分らない位だね。」

「さう仰しやる貴方だつて——」

「變つてるかしら」と、わざとからかふやうな調子で喬は言つた。

「變つてるわ、随分。」

「さうかなあ。」

「どうしてそんなに。」と茂も笑ひながら言ひ出した。「そんなにお爺さんくさくなつちやつたの？」

「お爺さんか。いやお爺さんにもなつたらうね。」

「少し、早過ぎやしないこと？」

「だが、これで、三人の息子の親父だからな。」

「え？ ……ごせうだんでせう。」と言ひながら、茂は彼の顔をのぞき込んで見た。

そして其處に、満更のせうだんばかしでもないらしい或ものを見出した時、急に不安になり出しながら再び繰返した。「ねえ、ごせうだんでせう？」

「うむ。まあ、せうだん見たいな話だね——實際の事實ではあるが。」

「さうですか！ まあ！」と言つて茂は瓊子の方を顧みた。けれども彼女は、餘程前から茂と喬とのどちらへも顔を背けたままである。

「茂ちやんが、さうまで興味をもつててくれるなら、ひとつ聞かして上げようか——つまりその、僕が如何にして、三人の息子の親父になりしかといふ話をさ。勿論馬鹿々々しい話だぜ。……うむ、君もそこへかけたらどつだ。」

斯う言つて、茂にも瓊子のそばへかけさせた後、喬は宛かも大人が自分自身にはあまり面白くもないお伽噺か何かをする時のやうな調子で、否それよりも、例の自分自身を嘲笑するやうな調子で、彼が一二年前から知り合つたといふ一人の婦人の事を先づ話した——

喬より三つ年上のその婦人は、二十一歳の時地方の小都市の多少の資産ある家へよめいらされた。そして彼女の良人の柄にもなく手を出した相場の失敗と、その爲めに一層ひどくなつた放蕩とから、よべの不幸なる事情を生んで来て、五年目に遂にその實家へ歸つて来た。といふよりも、寧ろ良人と良人以上にさへ道理の分らなくなつた、錯亂しきつたしうと姑等によつて逐ひかへされた。その時彼女は、三歳になる男の兒を手許に置くことが出来たのを、せめてもの仕合せに思はなければならぬ位であつた。ところで、両親ともにもうゐない、そして異腹の姉の繼いでゐる彼女の實家に、彼女等二人がいつまでも寄食して行かうとするのは無理だつた。

偕て彼女が、その男の兒を連れて行かれることを、何よりもありがたい事にして、人から勧められるままに再びかたづいたのは、大阪の或る會社に勤めてゐるといふ、少くとも善良で深切らしい人物の處であつた。けれども彼女が、その二度目の良人と間に二度目の男の子を産んだ前後から、彼はその下に働いてゐた女事務員か何かと、兎角の噂を立てられるやうな關係に墮ちて行つた。そして半歳ばかりの後には、會社の帳簿にもかなりの大きな穴をあけて置いた儘、その女事務員と手に手を取つて、いづくへともなく姿をかくしてしまつた。

斯うして置き去りにされた彼女が、十歳をかしらに三人の子供を、とり分け乳呑兒をさへ抱へて、どんなに途方にくれなければならなかつたかは、その話の大概を傳へ聞いた喬にも十分に想像することが

出来た。

「それから、御會ひになつたの？ 會つて見たいと御思ひになつたの？」と茂が待ち遠しさうにしていた。

「いや、會ふよりも先きに、結婚を申込んで見たのさ」と言つて、喬は聲高に笑ひ出した。

「まあ！ 會つても見ないで！」

「さうだ。といふのも、なまなか會つて見て、その氣がなくならない内にと思つてね。」

「それから其話は、どう……その儘でうまく纏まつたの？」

「いや、矢張、兎も兎も會つて見ようといふことになつちまつた。」

「そして會つて見たら？ どんな人だつたの？」

「まあ、僕の注文通りの婦人だつたね。」と言つて、再び聲高に笑つてゐる内に、彼は例の小さな犬が、又もや現れて来て、瓊子の膝に前足をかけて、小さな尻毛をふり動かしてゐるのを見出した。そしてそれに氣付かないでゐるらしい彼女へ注意を促した。「瓊ちゃん、着物を汚されるぜ。」

「ぶつ、ぶつ！ いけません！」と茂は、姉に代つて小犬を叱りつけたあと、又もや喬の方へ問ひたづねた。「そして其人は……喬さんの注文通りつて、つまりどんな人だつたの？」

「他の事は兎に角、なるほど二度位、亭主に棄てられさうな女だつたのさ。どつかしら不運らしい、一

生苦勞が絶えないと云つたやうな人相だつたのさ。さう云へば、實際涙黒子の大きい奴が二もあるやうだ。」

「さうですか。」と言つて、茂は自分自身でもやつと意識した位の太息をついた。「ぢや、そんな御同情から、ばかして、御一緒におんなすつたのね?」

「同情から? ……さあ」

「さうでせう、きつと」

「實は、自分でもよく分らないんだが……とにかく、一寸痛快だと思つたらしいね。」

「痛快つて、何が?」

「だつてさうぢやないか。さう云ふ女をさ、もう一遍棄てつちまふのも、僕の心次第だし——」

「まあ! そんな酷い!」と茂が遮ぎつた。

「待つた、待つた」と喬も笑ひながら、帽子で押へつける眞似をした。「それも僕の心次第だし、さう云ふ女を一生棄てないで、出来るだけ仕合せにしてやるといふのも、矢張僕の心次第だからね。そしてこの、僕の心次第つてことが……」

「さうですか!」と言つて、茂は前よりも大きく太息をついた。そして黙つて地上に目を落した。

「だが、茂ちゃん、さう眞面目になつちまつちや困るよ。さう云ふつもりで話したんぢやないんだから」

と、實際當惑したらしく言つてゐた喬は、例の小犬がいつの間にか瓊子の膝の上に抱き上げられてゐることを見出した。

「瓊ちゃん、駄目だよ。そいつには蚤が、それやひどい蚤がゐるんだよ。」

けれども瓊子は、その瘦せ細つた手と手の間に小犬の頸をはさんで、無言の儘に項垂れてゐた。そしてその胸から沸き上つて来るやうな熱い涙が、ほろほろと小犬の毛の中に雨り注いでゐた。

「蚤がゐるんですつて」と言ひながら、茂が立つて、姉の膝から小犬を下りさせようとした。小犬はどうしても下りまいとして、瓊子の袖を喰はへたり、帯に獅噛みついたりした。そしてそれをもぎはなした茂によつて、それほど手荒にするつもりでもなしに、つい地上へ仰向けにぶつりと取り落された時、「クイン!」と一聲哀しげに鳴き立てた。

すると、見る見る顔から血の氣がなくなつて、眞蒼になつて來た瓊子が、左の掌に口を抑へながら、新しいハンカチーフを袂の中にさがしてゐた間に、彼女の眞白い洋傘は眞紅に染まつてしまつた。

九

九月下旬の或る土曜日の事であつた。

女優の花房柳子が水上延雄と、いつも行きつけの家で一緒に夕飯を食べながら、いろいろな無駄話なぞをしてゐた時、延雄は何かの事の序に、明日東京にゐないから云々の言葉を漏らした。それに對して、別に深い意味からでもなく彼女は、「どちらへいらつしやるの？」と聞いて見た。

「一寸、何だ。」と言つて、延雄はもう十分にバタを塗られたパンの片に、更に重ねて塗りつけた。「小田原の方まで……事によつたら箱根まで行くかも知れないが」

「箱根？ いいわね！」と彼女は矢張り何の氣もなしに、そしてせうだん半分に言つてゐた。「ねえ、私もお伴さして頂けないこと？」

「さうだなあ」と言ひながら、彼が何だか當惑したらしい様子を、はじめて見て取つた柳子は、幾分さつきのと異つた氣持で、今一度同じ言葉を繰返した――

「ねえ、私もお伴さして頂けないこと？」

「さうだなあ。……僕一人で行くならいいんだが……」

「御連れがあるんですか？」

「それが、何だ。どうなるか分らないんでね。」

「ぢや、お連れがなかつたら、お伴さして下さる？ ねえ、いいでせう？」

結局延雄は、歸りにある人の處へ廻つて見て、そこでどちらにか決定したところを、早速電話でも知らせようと云ふことに、止むなく彼女へ約束した。

偕て食事を済まして、延雄が歸つて行つてから一時間あまりを、事によつたらすつとそれ以上を、柳子はただひとり居残つて待つて見たけれど、延雄からの如何なる音沙汰をも聞くことが出来なかつた。

彼女は先づ、箱根行きが物になるならぬは措いて、さうしていたづらに待たされてゐることを馬鹿々々しいと思つた。次ぎには、彼女の方で少し無頓着にしてゐれば、恐ろしく氣を揉み出して來る癖に、例へば先刻なぞのやうに、彼女の方から幾分でも倚りかかつて行かうとすると、妙に逃腰になるらしい此頃の延雄の態度を考へた。更に次ぎには、彼女のこれまで知つてゐるほどの男子等が、それぞれに皆、或る時期まで來ると、さうした態度を見せたものであることを考へた。そして斯様に、いつまでもいつまでもおんなじ運命を繰返して行かねばならないのかと思ふことが、またしても彼女に太息をもらさせた。

そこで延雄からの返事を催促する爲めと云ふよりも、寧ろこちらの不機嫌になつてゐることを知らしめて置く爲めに、八時半頃、柳子は思ひ切つて彼の家の方へ電話をかけた。彼がまだ歸つてゐなかつたのならば、その儘に打ち捨てて置かうし、彼がもう歸つてゐたのならば、彼女自身の方に差支が出来たので、箱根行きのお伴は止めにする、きつぱり言ひきつてやらうと思つたのである。

けれど、丁度今歸つて来たばかりだと云ふ延雄は、柳子からの一言をも待つことなしに、自分がどうしても直ぐに電話をかけられなかつた所以の理由を、たてつづけにこまごまと陳べ立てた上、更に突發した一事件の爲めに、残念ながら箱根行きをやめにしなければならぬといふことを告げ知らせた。

ところで、柳子からはなんにも言はさないで、自分だけ勝手な事を言つてゐるらしい延雄を、いよいよ腹立たしく感じながら、切めて最後に何か一つ胸のすくやうな事を言つてやらうと思案してゐた彼女は、さうして受話器を耳にあててゐる中にふと、明日が日曜であつたこと、彼女自身がそれを土曜日とばかり思ひ込んでゐたことを知つた。

延雄が二週間目の日曜日に、その細君の病氣を見舞ひに行つてゐるといふことは、彼との關係がまだ今ほどにならない頃に彼からきいて、彼女も十分に知つてゐた（瓊子が片瀬から平塚へ移つた事などは勿論知らないのだが）。そして今、明日が日曜であることを知ると共に、丁度彼の見舞ひに行く日に相違ないやうにも思はれて来たのである。

しかし、今更、日曜を土曜と取り違へてゐたといふのは、何だか言ひ難い事のやうに思はれた。少くとも、彼から本當にして貰へさうになかつた。そして、それを本當にして貰へない位ならば、いつそのこと、彼がその細君を見舞ひに行くのであらうことを承知の上で、わざわざ難題を持ちかけて見たもののやうに装ひたくなつて来た。

その上、彼が淡泊に話してくれないで、矢張り白つぱくしてくれてゐることの水臭さを考へると、それに対する腹癒せからでも、意地にも彼を箱根まで引張り出してやらねば濟まされぬやうな氣持になつて来た。

彼女のさうした氣持の急變と、これまでもないほどの執拗さを、少からず驚いたらしい延雄は勿論、さきほど述べた事情を反復したり、新しい口實を附加したりしながら、やつぱり逃げられる限りを逃げようとした。けれども、彼が逃げようとするればするほど、いよいよ熱心に、いよいよ懸命に彼女は彼を追つ掛けて行つた。

「ぢや、仕方がない。全く困るんだけど」と、遂に彼も兜をぬいだ。

「ぢや、九時十分のね、そしてね、八時までだつたら、こちらへ来て頂かうし、それから……もしもし分つて？ よござんすか？ 間違つちやいやよ、左様なら。」

斯う言つて受話器を耳からはなした柳子は、電話室を出て、階段を下へおりながら、先つ二三度ばかり

り大きく息をついた。そして徐ろに彼女の小さな勝利を享樂しはじめた時、はしなくも延雄の妻の事が、……恐らくは明日はじめて彼から待ちほけを食はされるであらう、氣の毒な彼の妻の事が、ちらりとその意識の表面に浮び上つて来た。しかし、これまでとても成るべく問題にしないやうにとつとめて来た其事を、今日はとり分け問題にしたいやうに彼女は思つた。

それから彼女は、暫くぶりに夏山縁と犬塚良策との處へ寄つて見る氣になつた。

縁は、だんだん目の悪くなつて来た犬塚が、背景などに關する仕事を、すつかりあきらめさせられた爲めと、彼女自身に殆んど報酬らしい報酬をも貰へない爲めとで、芝居の方へ出なくなつてしまつてから、かれこれ二三ヶ月にもなつてゐた。

その彼女が今日此頃、どんな日を送つてゐるのであらうか。最近に××××會社から經營上の保護を受けることになつた未來劇場と共に、柳子等が地方廻りなどをしてゐる間に、縁とその不幸なる同棲者とは、どんな新しい境遇へ流れ込んで行つたであらうか。

東京へ歸つてからも一週間近くもなるのに、つひ様子を見にも行かないでゐたのが、何だがひどく濟まない事であつたやうに思はれて来た。そして若し、あんまり氣の毒な事にでもなつてゐるのならば、幸ひ息を吹き返してゐる彼女達の劇團へ、今一度復歸をすすめて見たらと、そんな事を衷心から考へてやる位の友情をも、柳子は彼女に對して有つてゐたのである。

柳子が格子戸の外から案内を乞つたとき、直ぐには誰も出てくれなかつた。そして奥の犬塚等の室——それがもう誰か他の人の室になつてゐるかも知れないと柳子は思つた——で、「御仕立物」の後家さんの十二になる息子が、かねて聞き覚えのある其聲で、拾ひ讀みにも似合はない張り上げた調子で、新聞記事か何かを讀んでゐた。

試みに引張つて見ると、するすると格子戸があいたので、眞暗な狭くらしい土間へ構はず足を踏み入れた柳子は、そのあとへ格子戸をしめながら、前よりも思ひ切つて聲高に案内を乞つた。

「歸つたのかい？」と云ふ、犬塚の幅のある大きな聲と共に、新聞を讀んでゐた息子は讀み止めた。

「たか子かい？」（たか子といふのは夏山縁の本名である）

「いいえ、あたし。花房。」

「ああ、柳子君か。上つてくれたまへ。」

やがて例の少年が出て来て、玄關の方をも明るくしてくれたので、柳子は彼と一緒に犬塚の室へはひつて行つた。犬塚はその机に脊をもたせた儘、それでも投げ出してゐた脚を一寸引つ込めながら彼女を迎へた。そして彼女が御無沙汰のお詫びなど一通り済ましたあと、「その後、御日の方は？ 矢張りいけませんか？」と問ひたづねたとき、これまで知つてゐる犬塚のやうでもなく、素直な、殊勝な、むしろセンチメンタルと云ひたいやうな調子で答へた。

「有難う。どつちね、だんだん不自由になつちまつてね。」

「さうですか。」

「今も、この人に——清ちゃんに夕刊を讀んで貰つてたんだ。晝間明るい時分には、この障子の」と言ひながら、犬塚は障子からだいたいぶはなれた床の間の方を指さした、「この障子のさん位分るんだが、夜分になると、どうも、なんにも分らないんでね。」

「まあ、そんなに御悪いんですか。」

「まづ、殆んど完全な盲人になつたわけなのさ。」

「それぢや、お書きになる物なんぞも……」

「いや、原稿なんぞは、人に書き取つて貰へないこともないんだが、ただ、買ひ手のない原稿ばかり拵へてもつまらないからね。」

「縁さん……たか子——さんは？」と柳子は、犬塚夫婦がどうして生活してゐるかを、再びその心の中に痛切な問題にしながらいて見た。

「いつも七時頃までには歸るんだが——」

「どちへか御勤めですか？」

「うむ。この一月ばかり、いや、もつともなるかな——」

斯う言つて、一寸何事かを考へ込んだあと、重ねて柳子から問はれる儘に、犬塚は縁のたか子が近頃或る商店の店番みたいな仕事に備はれて行つてゐること、そのお蔭で以て辛うじて干乾にもならないでゐることなどを話した。

それに對して柳子は、自分自身の現在の境遇を打ち明ける序のやうにして、未來劇場の幾分景氣を回復してゐることを詳しく話し、それとなくたか子——縁にも復歸させて見たらといふやうな意見をほのめかした。

「それや、唐物屋の店番なんぞしてゐるより、第一、内にゐてくれる時間も多くなるし、それに御話のやうだと、未來劇場も今度は……まことに萬事好都合のやうぢやあるが、ただその、あいつがどう言ふか——」

「いやだと仰しやるでせうか？ 何か、さう仰しやりそうな……」

「なにしろ、近頃、妙に頑固な事ばかり言ふやうになつてゐるもんだから。」

「頑固な事を？ 縁さんが？」

「うむ」と言つて、何だか柳子の臍に落ちないやうな、温かみのある聲で笑つてゐた犬塚は、不意にその耳のそばへ手を持つて行つた。「歸つたらしいな。」

「只今！」といふ縁の聲が聞えて、それから格子戸ががらりと引きあけられた。

けれども柳子は、やがて彼女の前に現はれた人の姿を一瞥した時、殆んどそれが縁であることを信じ得なかつた。なぜと云つて、彼女のこれまでに知つてゐる縁が、男物とも女物とも分らないやうな染緋の單衣に、色のあせたメリンスか何かを無雑作に絡めて、大きな新聞包みをぶらさげて、たとひ夜分であらうとも、構はず外を出て歩くと云ふやうなことは、到底想像することも出来なかつたからである。その上、縁がその人並以上にも塗り慣れてゐた白粉を、全く塗らないで、柳子同様寄る年波の争はれない地顔を、醜らしい灯の下に暴露しながら、何事もなげにしてゐたことは、柳子への文字通りの驚異であつた。彼女は、その場にふさはしき挨拶の言葉をさへ忘れてしまつた。

縁は、大變に歸りの遅くなつたことの理由を述べて、柳子へも、より以上に犬塚へもお詫びをしたあと、背後の襖を細目にあけて、ちらりと隣の室をのぞいて見ながら、犬塚へ問ひたづねた――
「随分、お腹が空いたでせうね？」

「そんなでもないよ。」と犬塚も、従順な、辛抱強い子供か、その母や姉なぞからやさしく問ひたづねられた時のやうな、妙にタッチングな調子で答へた。「晝飯を二時過ぎ、大方三時頃になつて食べたんだからね。」

「でも、もう九時半にもなるんだから。……柳子さん、一寸失禮。」

斯う言つて、隣の室へはひつて行つて、簡単な食事の支度をでもしたらしい縁のたか子へ、犬塚

はこちから大きな聲で、彼女の留守中に訪ねて来た人間の事や、後家さんから貰つた御馳走がそこにらに置いてある筈の事などを話しかけた。けれども、さうして二人つきりで話し合つてゐるのを拙いと氣付いた時、はじめて思ひ出して、彼の縁を未來劇場へ復歸させて見たらといふ柳子の提案を取り次いだ。そして、彼自身は縁さへその氣になるならば、むしろ賛成したい位であるといふ意見を附け加へ、結局彼女がどう思ふかを問ひたづねた。

「貴女の大嫌ひな×××さんももうなくなつたし、それに縁さんがもつ一度いらつしやるやうになれば、みんなどんなにか……あたし達も本當に嬉しいわ。」と柳子も言ひ添へた。

「さうですねえ。」と縁は言つたきり、暫くの間を黙つてゐた。

「ねえ、いらつしやいよ――もう一度。」

斯う言ひながら柳子は、成程さきほど犬塚の言つた通り、縁がこれまでの彼女とまるでちがつたやうな、妙に頑な人間になつてゐるなと思つた。そして彼女の提言が、容易に同意されさうにもないことを覺悟した。

「折角、さう仰しやつて頂くのを、何だけれど」と言つて、縁は再び暫くの間を黙つてゐたが、やがて玩具のやうな小さな塗盆にお茶を運びながら、柳子や犬塚のゐる方の室へ姿を現はした。

「いやだと仰しやるの？　どつしても！」と柳子は、凡そ見込みのないことを知りながら、もう一度念

の爲め言つて見た。

「私ね、お芝居が」と縁のたか子は、御客様へお茶をすすめたあとの手で、油氣のない髪の毛を、その額からかき上げながら言ひ出した。「貴方の前だけれど、芝居をする、芝居に……関係のある人達みんながね、何だか嫌ひになりましたの。」

「まあ！」

「それやね、斯うしてお交際するのは、ちつとも……あら、御免なさい！　こんな失禮な事を言つて！」

「いいえ、そんな事なんでもないんですが、急にまたどうして？」

「どうしたのか、近頃急にあんな事を言ひ出してね。」

「さうですか」と言つて柳子は、誰かから十分なる説明をでも與へられたかのやうにひとり、でうなづいた。

「むづかしい言葉で云ふと、つまり、ああした社會の空氣が、アトモスフィアが……」

斯う言つてゐる内に、犬塚は突然くしやみをし出した。縁のたか子は、今迄明けはなされてゐた襟側の障子を細めるべく起ち上つた。

「さうですか。」と言つて柳子は、誰かから前よりも一層十分なる説明をでも與へられたかのやうに、一層感慨深さうにひとり、でうなづいた。そして暫くの間、自分自身にもあとから思ひ起されなかつたやうな

何事かを、ちつと考へ込んでゐた後、ふと我に復つて、目を舉げて見ると、縁がいつの間にか犬塚の袷羽織を取り出して来て、それに彼の手を通させたり、その紐を結んでやつたりしてゐた。

「それぢや、一寸失禮してね。」と縁は、彼の襟の處を直してやりながら囁やくやうに言つて、それから柳子の方へふりむいた。「一寸失禮してお茶漬をいただきます。」

「どうかごゆつくり。」と挨拶しながら柳子は、縁に手を引かれて隣の室へはひつて行く犬塚の痛々しげな、けれども幸福らしい背姿を、いな、さうして彼の手を引いてやりながら、一層幸福らしい縁の様子を、まばたきもしないで見守つてゐた。

やがて二人がそのささやかな食卓に着いたらしく、犬塚はその何よりの好物を彼女から調へて来て貰つたことの悦ばしさを表白したり、さうして食事をする際にも、色々に手傳つて貰ひ、いたわつて貰ふのを、出来るだけ遠慮しようとしてゐた。すると又縁は、母や姉が子供の不心得をたしなめるやうに、彼の餘計な遠慮深さをやさしくたしなめたり、さうしたあとで二人とも、あまりにセンチメンタルになり過ぎてゐることに心附いて、思ひ出したやうに、罪のないユウモラスなその日の見聞を話したりした。

それらの對話を模趣しに、断片的に、けれどもその意味をはつきり聞き取つてゐた柳子は、不意に、或る急ぎの用件を忘れてゐたからと言ひ出して、犬塚達が食事を済ますのを待たないで外へ出た。

その儘家へ歸る氣になれないで、なんのつもりともなく飯田橋の際まで眞直ぐに来て、それから左へ折れて、人通りの種な暗い土手の上を、牛込見附の方へ、新見附の方へ歩きながら、柳子が執拗に反復して考へたのは、彼女の友人の新しくはひつて行つた、どんなに羨望しても足りないほどの、幸福な境遇の事だつた。

そもそも柳子と縁とは、殆んど同じやうな自暴自棄から出發して、殆んど同じやうな淪落の長い生活を、半ば無感覺にしつづけた後、流石にだんだんと若くなくなり、美しくなくなり、異性の心を捕へにくくなるといふことに對する、殆んど同じやうな不安と焦躁と恐怖とへ到着してゐた。そしてさうした共通の事情と氣持とが、比較的に新しく知り合つた間ながら、彼女等二人を不思議な位親密に結びつけてゐた。

然るに今、二人の中の一人は、不幸なる他の一人をより不幸にすべく、だしぬけに、ぬけがけして、その行き着くべき所へ行き着いてしまつた。

同じやうに帆を破られ楫を折られて、大海の波に漂うてゐた二艘の中の一艘は、忽ちに吹き起つた強風を順風にして、如何なる不安と焦躁と恐怖との激浪からも襲はれることのない、世にも安全なる港の中へ逃げ込んだ——その事の爲めに、あとに取り残された他の一艘をして、彼女をとり巻いてゐる大海を、一層暗いものに、一層底の知れないものに、一層陸地から遠いものに思はせる爲めに！

彼女の側から云つても、犬塚の側から云つても、幾度目の無意味な反復か知れなかつた、あんなにもいい加減なものであつた二人の關係から、そもそも何といふ不思議な、何といふ素晴らしい變化であらう！

あんなにも狂儘で、亂暴で出鱈目であつた犬塚が、あんなにも素直な、從順な、ちやんとした心を持つやうになり、異性といふものに對して、あんなにも本氣になれなかつた縁が、あんな男物か女物か分らないやうな染緋なんぞ着て、あんな剥げつちよろのメリンスなんぞ締めて、いやそれよりも、髪の毛もあんなにして、白粉をさへ塗らないで、そしてただ目の見えない、不幸なその良人の世話をするやうになる！

さうだ、今こそ、彼は本當に彼女の良人であり、彼女は本當に彼の妻である！ 恐らくはいつまでも彼の妻であり得るだらう！

そして、そして何よりも柳子に羨ましいのは、彼女がこれからどんなに年をとつて行かうとも、どんなに醜くなつて行かうとも、彼女の良人からはつひに聊かをも知られないで濟むといふことである！

いたづらに、太息のあとに太息を吐いて、いたづらに寢返りを打ちながら、その夜を明し過ぎてしまつた柳子は、遂に思ひ切つて床を出て、北向きの窓からさし入る薄明の中に、彼女が平生から不眠

をふせぐ爲めに用ゐてゐたベルモットの壘を捜した。そして其壘にまだ半分近くも残つてゐたのを、湯呑茶碗については飲み、ついでは飲みして空にした。

流石にその效驗で、間もなくぐつすり寢込んでしまつた彼女が、毎朝の日課になつてゐる階下の爺さんと婆さんとの、お味噌汁の出来不出来についての罵り合ひに驚かされて、はじめて重たい臉を開いたのは、八時に二十分前の頃であつた。

彼女は直ぐに、延雄がゆうべの約束通り、八時までにはこちらへ来るかも知れないことを思ひ出した。けれども寢衣の儘階段をかけ下りながら、今となつてはもう、使をやつても電話をかけさせても、恐らく間に合はないだらうことに氣付いたので、加之、やがて一人つきりになる婆さんをも外へ出したあとで、延雄に飛び込まれるかも知れないことの危険にも氣付いたので、思ひきつて居留守をつかふことにした。

借て、彼女が再び二階へ引き返して来て、再び横にならうか、それとも縁へ宛てての手紙をでも書かうかと思案しながら、寢床の上に片膝立てて、敷島を喫む爲めのマッチを見廻はしてゐた時、突然階下の入口の戸ががらりとあいて、延雄らしい人の聲がした。

彼と應對してゐる婆さんの言葉は、よりはつきりと彼女へ聞えた。婆さんはさきほど頼まれた通り、柳子が昨晚どつかへ泊つたのか、つひに歸つて來なかつたと、かなりまことしやかに言つてゐた。

それをどれだけ本當にしたのか、暫くの間無言でゐたらしい延雄は、最後に何か一言二言云ひ置いて歸つて行つた。その言ひ置きはあとで婆さんから聞けば、夕方また來て見ようといふのであつた。

そしてその言ひ置き通り、午後の六時頃再び延雄が訪ねて來た時、彼は婆さんが柳子から預かつてゐるといふ置手紙を渡された。その置手紙には次ぎのやうに書かれてゐた――

「今朝程は大變に失禮しました。十時過ぎに歸つて來て、お婆さんから御傳言をきいて、本當に濟まないと思ひました。

私は、貴方が實際にお伴さしては下さらないものと思つてゐたのです。

いいえ、それよりも私は、急に頭が變になつて來たのです。

私も、將來の事などを、今度こそ眞面目に考へ出しました。そして何だか、頭が變になつて來たのです。

こんなきちがひは、もう御相手になさらないで置いて下さい。全くきちがひです。

一三日旅行に出かけます。事によつたら、もう少し歸りがのびるかも知れませんが、こちらから御知らせしなければ、まだ歸らないものだと思つて下さいまし。

延雄が階下で此置手紙の封をきつて読み出してゐた時、階上では柳子が、電燈をも點さない薄暗い室の、終日敷きばなしの儘の床の中に息を殺しながら、その同じ手紙を、彼女の心の目の前に繰りひろげて、くり返しくり返し讀んでゐた。

何と思つたのか、今度はなんにも言はないで、その儘延雄が歸つて行つてから、凡そどれほどの時間を柳子は、彼女の暗い室と暗い心の中に、引きつづき横つてゐたかを意識しなかつたが、不圖階下から「花房さん、お客様よ！」と呼び立ててゐる、お婆さんの聲を耳にした。

まさか延雄が引き返すわけもないだらうと思ひながら、柳子が階段の降口から下をのぞいて見ると、會つて未來劇場にも關係してゐたことのある加治木といふ男が土間に立つてゐた。

常に好んで蛇の脱殻のやうな衣類を着けるところから、口の悪い犬塚に「蛇殻」と仇名を與へられてゐるその男は、柳子が少し健康を害つて臥んでゐると言つたにも拘はらず、「それはいけませんね」と言つたり、「なにしろ、どうも此頃の陽氣が陽氣ですからな」と言つたりしながら、ずんずんとあがり込んで来て、いやに馬鹿丁寧な言葉遣ひと正反對に、直ぐからもうそこに大あぐらをくんで、喫みさしの葉巻を袂から取り出して、すぱりすぱりとやり出した。

「加治木さん、何か、御用が御用ですか？」と、遂に我慢がしきれなくなつたらしく柳子はきいた。

「御用？ これは御挨拶ですね。さう仰しやられると、何の用事もないのに、ちよくちよく押しかけて來

るやうで、ちと外聞が宜しくくないですな。」

「でも、今日は私、氣がくさくさして、しやうがないんですから。」

「成るべく早く埒をあけるとの御仰せ？ いや、御道理々々。就いては早速ですがね、實はその柳子さんに對して、所謂足駄はいて首つたけといふ程度の憧憬をもつてゐる——」

「今日は本當に氣分が悪いんですから。」と彼女は、そのこめかみの處を抑へながら加治木の言葉を遮ぎつた。「そんな御冗談はもう止して下さいな。」

「御冗談ですつて？ これが！ 弱つたなあ。」と言つて、實際に一寸當惑したやうな顔をした「蛇殻」の加治木は、それでもやがてまた捲土重來の勢を回復した。「兎に角、貴女に是非是非御目にかかりたいといふ人があるんですよ。息の通つてゐる内に、たつた一目でいいから、どうか柳子さんに——」

「一寸！」と言つて彼女は再び加治木の言葉を遮ぎつた。「息の通つてゐる内につて、たしかさう仰しやつたわね？」

「さうです。この」と言つて彼は、左の手でコッコツと胸板を叩いた、「この病氣でね、もう長い」とはないと、自分でも覺悟をしてゐるんださうでして

「さうですか。」

「まだ、二十五とか六とか云ふのに、可哀想ぢやありませんか。」

「まあ、そんな御若い方なの。」と言ひながら、柳子はちつと考へ込んだ。彼女の心の目には先づ、雪白なベッド・シイツの上に静脈の蒼く透いて見える手足を横へて、淋しげに何事かを待ち受けてゐるらしい一人の青年が見えた。けれど、やがてその青年がベッドを下りて、物につかまりながら危なげな足を戸口の方へ運んでゐる中に、彼はいつの間にか目の不自由な犬塚になつてゐた。犬塚は縁の歸つて來てくれるのを待ちかねてゐるやうに見えた。

「それに、私は會つて見たわけぢやありませんが」と言ひ出した加治木は、柳子があまりに突然に、あまりに興味をもちすぎたらしいのを驚きながら、それでも其機會に乗することを忘れまいとした。「なんでも素敵な、すばらしい美人ださうですよ——柳子さんの前ですが。」

「何ですつて？」と彼女は、自分の耳を疑ひながらたづねた。「美人ですつて？」

「といふ事ですがね。」

「さうですか。御婦人の方ですか！」

斯う言つて、柳子は覺えず太息をついた。それを又、加治木が見逃さなかつた——

「御婦人ときいて、急にがっかりですか。いささか現金すぎやしませんかね……とにかくそれぢや、この私が非常にその何ですが……ほんの一目、御目にかければ宜しいんださうですから——」

「でも、その方は御婦人ですのね」と柳子は何處までも眞面目であつた。「さうでせう？」

「それや、その」と、曖昧な事を言ひながら頭を掻いてゐる間に、加治木は一の活路を見出したらしかつた。「それや、その、さう申し上げるのは申し上げたですが、實際はあんまりたしかぢやないんですよ。ただその、平塚の海岸で、肺を病んでゐる、そして若い人と來たもんですからね、まあ誰にしたところで、浪子さんのやうな別嬪さんを想像しませぬ。とにかく、それは婦人なりや、はた男子なりやがです。ね、しかく重大なる問題になつて参りまするなれば、今日の處は一先づこれで引き取りまして、いづれ又明日にでも、出直して参りますることに致しませうかな。」

斯う言つたあとで、柳子の前の敷島の袋を引き寄せて、それから引き出した一本に火をつけて、いよいよ起ち上らうとした加治木は、最後に今一つ彼の特色を發揮すべく、さつきから無言の儘に何事かを思ひ耽つてゐる彼女へ話しかけた——

「だが、柳子さんもなかなか旗幟を鮮明にして來ましたね。女なら眞平だが、男ならばと御意遊ばす！これぢや水上さんたるものも……いや、大變に失禮しました。」

斯うして訪ねて來て、斯うして歸つて行つた「蛇殻」の加治木は、それでも滿更の出鱈目を言つてゐたのでもないらしく、翌日の朝使の者に手紙をもつて來させた。

その使の者を階下に待たして置いて、柳子が急いで讀んで見ると、加治木は先づ、疎忽者の自分が、彼女に會ひたいといふ本人の身分などについて、碌碌ききもしないでゐた爲めに、ただ彼女の大切な時

間をつぶさしたにすぎなかつたことの遺憾をのべ、またその失禮を謝してゐた。次ぎに改めて、その本人といふのが自分の友人の友人で、藤島喬といふ立派な紳士（彼はそこに括弧をいれて、京都大學出身の文學士といふ註釋をして置くことを忘れなかつた）の従弟で、矢張り年の若い男子であつたことを保證した。それから、昨日自分の言つた通り、本當にもう長くないことが、本人にも周囲の人達にも確實なので、まことに御無理な御願ではあるけれども、是非是非本人の痛切なる希望を満足させてやつて頂きたいといふこと、就いては本日午後二時頃右の藤島氏を同道參上の上、重ねて御願ひするつもりであつたが、よんどころなき急用突發の爲め、残念ながら藤島氏一人を伺はせる故、どうか宜しくといふこと、そして本日午後柳子の方に差支があるならば、いつ伺つたらよろしきや、御漏らしを願ふといふやうなことを書いてゐた。すべてが平生の加治木らしくもない、加之、ゆゑの彼の話などはまるで異つた、ちつとも無駄のない眞面目な調子であつた。

ともかくも、その藤島といふ人に會つて見ることにきめた柳子は、其手紙を巻き收めながら下りて行つて、使の者に傳言した。

すると午後の三時近くなつて、少し遅くなつたことを詫びながら、藤島といふ人が訪ねて來た。その人は、彼女の職業や生活が何であるかをさへ知らないやうな、知ることの興味をもたないやうな態度で、加治木を通して依頼してある一件を、ごくごく手短かに反復した後、決して彼女をからかつたり、冗談

口を利いたりしてゐるのでないといふことを、その沈みきつた聲の調子に保證しながら附け加へた——
「貴方の方では、勿論御記憶もないでせうが、本人は度々御目に掛つたことがあるやうに言つてゐるんです。そして誠に内氣な、妙な性質なものですから、それだけの事を私に打ち明けるのさへ、餘程の勇氣を要したと云ふんです。」

彼は更に、彼女も一緒に笑ひ出すことが出来るやうな、飄逸な、けれども輕薄らしくない笑ひ方をしながら附け加へた——

「それから、御多忙のところを、御無理を願ふことでもありませんから、出来るだけの御禮はさせるつもりです……いや、私からも致します。」

「そんな事は、どうでも……」と言ひさして柳子は、彼女自身あまりに正直な事を言はうとしてゐたのに心付いた。『御禮なんぞどうでも宜しうございますが、私も何だかその若い方に御目にかかつて見たくなりました』と、危ふく言つてしまふところであつたからである。そこでより用心深く出直した、「とに角、まだここ二三日のところは閑ですから、明日にでも早速御伴さしていただきませう。」

「さうですか。それやどうも。全く飛んだ御迷惑ですね。」

「私なんぞには第一、あまり適役の方でもないんですけれど」と言つて彼女は再び、彼女自身がそれほど興味をもつて來たのでないことを、婉曲に證據立てようとした、「御話の、御禮をたんと頂けるのを樂

みにね、ほ、ほ、ほ……」

借て此時に約束した通り、翌日のお晝過ぎ彼女は藤島喬に連れられて平塚へ出掛ける汽車の中にある。彼女も彼も、出来るだけ相手をそらすまいとする殊勝な心掛の所有者であるに係はらず、それに必要な會話の技術に長じてゐない方の人間だったので、二人の間にはともすれば、十分二十分にも亘るやうな長い沈黙が支配した。

さう云ふ場合、筋向ひにかけてゐた藤島は、汽車の進行ののろさを苛立たしく感じてゐるやうに、そのポケットから鎖もなんにもついてゐない、銀か、それともブラチナかの時計を掴み出して見たり、窓の外をのぞいて見たりした。

彼女は窓に肘をかけて、頭痛膏のはられてゐるこめかみの邊を押へながら、彼女自身の上につつたそれまでの事と、それから後に起るかも知れない事とを思ひ耽つてゐた。

とり分け、彼女の考へたのは先づ、自分から急にあんな態度を取り出された延雄が、その後どうしてゐるだらうかといふことであつた。次ぎには、彼が彼以外の異性との新しい關係を猜疑してゐるかも知れないといふことであつた。次ぎには、彼にさう取らして置くのが却つて便利らしいといふこと、そして彼にさう取らさうなく、今日の平塚行きが偶然にも大に役立ちさうだといふことであつた。けれども最後には、それが何に役立つか役立たないかは暫く措き、不思議な魅力で彼女をひきつけてゐるといふ

こと、そしてそれがあとから振り返つて見て、どんな馬鹿馬鹿しい事件であらうとも、兎に角、かうした豫想の享樂に浸つて見るだけでも、現在の自分に許し與へられる、恐らくは一番大きな幸福であらうといふことであつた。

その内平塚の驛へ着いて、プラットフォームを外へ出た二人が、生憎と人力車の足りない爲めに、暫くの間をそこに待たされてゐた時、藤島は突如として言ひ出した――

「實は、御會ひになつて頂くまで……黙つてゐるようかと思つたのですが――」

「え？ 何ですの？」と柳子は叫ぶやうに言つた。

「御會ひになつて頂いた時、あんまり貴女を驚かしたんぢや、病人の方も驚くだらうと思ふんです。」

「驚くと言つて、もし、どんな事ですの？」

「なあに、そんな大した事ぢやありませんがね、ただ、その、例の加治木さんの入智慧でね、一寸貴方を瞞して連れ出したんですよ。」

「と、仰しやると？」

「つまり、私のいとこは女なんです」と言ひながら、大當に申譯がないといふやうに藤島は頭を下げた。

「まあ！」と言つたきり、彼女も直ぐには藤島や、その教唆者であるところの加治木を非難する氣にもなれなかつた。「矢張りさうですか！」

「しかし、女を男と言つただけで、あとの事はみんな本當なんです。そして、いづれ本人から詳しく申上げるでせうが、どうしても御目にかからないでゐられないやうな、深い事情があるんださうです。御話して見れば、貴女にも御心當りの事が……」

彼が斯う言つてゐるところへ人力車が來たので、彼は柳子にも乗るやうにとすすめながら飛び乗つた。彼女は、すすめられる儘に無意識的に乗つたあとでも、今一度獨白のやうに「矢張りさうですか」と繰返さないでゐられなかつた。

間もなくむかふへ行き着いて、車を下りると、藤島は玄關のところへ出迎へた女中へ、二言三言何か言ひつけて置いて、それから庭を廻つて病室の方へ柳子を案内した。

病室の方は、廊下つづきの別棟で、その縁側に近く、俯いて雑誌か何かを讀んでゐた一人の看護婦は、二人の足音に目を舉げて見て、先づ病人へ告げ知らせた――

「御客様と御一緒に、御歸りになりました。」

「只今？」と言ひながら、藤島は自分からさきへ縁側へ上つて、柳子にも上らせ、座敷の中へはひらせた。「どうか御遠慮なく。でないと、病人の方もつい無理をしますから。」

斯う言はれたにも拘はらず、そこに臥てゐたうら若い夫人の姿を一瞥したや否や、柳子はあゝかも見合ひをさせられてゐることにはじめて氣付いた人達かなんぞのやうに、辛うじて中へはひつた位に――

すつかり硬くなつて、隅つこの方に小さくちぢこまつてゐた。

病人も、柳子から「どうか、もう其儘に。」と繰返して言はれ、その従兄からさへ、「そんな無理をするもんぢやないよ。」と言はれるのを肯かないで、自分自身では殆んど返りさへむづかしい位の衰へた體を、看護婦の手に抱き起させた。

「よく、いらして、下さいました！」と彼女は、その肉體のやうにほつそりした、けれども、恐らくはその魂のやうに透き通つた聲で、靜かに挨拶した。「さだめし、御忙しくゐらつしやるところ々！」

「いいえ。只今では別に……」

「本當に、よくいらして下さいました！ わざわざ、こんな處へ。」

「大相御閑靜で。それに海もお近いやうでございますね。浪の音がよく聞えますこと！」

「もうあれとも、いよいよの御別れですの！」

斯う言つて、一生の終りの近づいた爲めに、その美しいところを一層美しくされたのではないかと疑はれるやうなうら若い夫人は、その膝の上にはらはらと涙をこぼしたらしく思はれた。けれども、それをたしかめることが出来ない位に、柳子の兩眼もいつの間にかもう濡んでゐた。

「そんな、そんな御心細い事を、奥様、仰しやるものぢやございませんわ」

「どうも、さうして無理に起きてちや善くなささうだ。」と言ひながら、夫人の従兄は今迄使つてゐた

團扇を投げ出して、彼女のそばへにじり寄り寄つて来た。けれども彼自身彼女の體へ手をかけろことを遠慮したかの如く、ただ看護婦へ目示して、手真似をして見せて、再び横に臥かしつけさせた。

「喬さん！」と暫くしてから彼女は言つた。「御願ひですから、あとでね……」

「あとで？」

「貴方から、ようく……御詫びをしてね。」

「御詫びをしてくれつて……花房さんに？」

「ええ。」

「あの、私にでございませうか？」と言ひながら柳子も、夫人と顔を見合はすことの出来るやうな處まで進み出た。

「私ね、ただ御目にかかつて見たかつたものですから。」と夫人は、その従兄から取次いで貰ふつもりをやうにして言つた。「別になんにも、お話しするやうな事はなかつたんですから。」

「加藤さん、濟みませんが。」と従兄は看護婦の方へ微笑しながら言つた。「一寸の間三人で話したい事がありますから。貴女の御役目は私が引き受けます。」

看護婦の姿が廊下傳ひに主家の方へ消えて行くのを目送したあとで、もし何ならば従兄自身も席をはずさうかといふことを彼は提言した。けれども、ただにその必要がないのみならず、寧ろどうしても彼

にゐる貰はなければならぬことを切言した夫人は、やがて彼の手を煩はして、彼女の枕の下から一の鍵を捜させ、枕元の小さな巻繪の手匣をあけさせ、その中からより小さな、より美しい一つの箱を取り出させた。

「指環だね。」と言ひながら夫人の従兄が蓋をとると、そこには先づきらりと人の目を射る物が現れた。それは白金らしい金屬の臺にのつた、實際の大ききの十倍ほどにも幻覺されさうな無色の石であつた。

「随分高價な品であらう！」と柳子は、彼女自身の心へ囁いたあとで、覺えずその目を伏せた。

「だけど。」と夫人は、急に躊躇し出したやうな調子で言つた。「だけど、あんまり失禮じせうか？——こんな物を差上げるつてことは。」

「さうか。」と一應自分でうなづいた後、従兄は再び考へ込んだ。「さうだなあ。」

それから夫人は、彼女が八歳の時に亡くなつた、父の記念のネキタイ・ピンから石を取つて、それで其指環を作らせたのであるといふこと、けれども、あまりにきらきらと輝きすぎて、彼女自身にふさはしくないやうに感じられた故、恐らく彼女の従兄等にさへ記憶されてゐないであらうほど、極めて稀にしかはめたこともないといふこと、取り分けこの數年といふもの、ただの一度も身につけなかつた故、病人の持物として見られなくともよいといふことなどを、折々苦しげな咳に妨げられながら話した。そ

して、謂はば彼女の氣まぐれから、多忙な柳子を平塚くんだりまで、だまして引き寄せたりなんかしたことの失禮に對する、ほんのお詫びの印しるしとして、幸に其指環を受け納めて貰ふことが出来るなら、どんなに嬉しいか知れないと言つた。

「まあ、飛んでもない事でございます！ 私わたくしなんぞに、そんな結構な……」と柳子は、實際自分が安心して受け納めるべく、あまり高價な品でありすぎることを残念に思ひながら答へた。

「どうか、そんな事を仰しやらないで。どうせ私には、なんにもならないもの……ですから！」

『でも』と柳子は、事によつたら其肉體の健康と共に、其精神の健康をもなくしてゐるのかも知れない、この夫人一人の考だけできめることをさけるつもりから、彼女の從兄の意見を、その顔の表情に讀まうとしながら言つた。『でも、私わたくしなんぞが頂きませんでも……』

「いいえ、私わたくしは、誰よりも貴女に……私わたくしは、ひ、と、り、ほつちですの！ 私わたくしは……」

斯う言つてゐる内に、遂に歎歎すすりなきをはじめた夫人は、彼女の從兄の方へ手を伸べ、ハンカチーフを乞ひ求めた。

「こんなにまで言つてゐるんですから、病人の氣のすむやうに、どうか貰つてやつて下さい。」と言つて、從兄も恐らくは涙ぐんでゐたらしい其目を伏せながら、指環の箱に蓋をして、それを柳子の前へ押し進めた。

柳子には、夫人のあゝした急激な、過度な、どつかしら不自然なところのある興奮に、斯うしてたやすく共鳴してしまつたらしい從兄の心持が、何だか不可思議な、むしろ無氣味なもののやうにさへ感じられた。それにも係はらず、より、詳しく説明を強要したり、引き續いて夫人からの贈物を拒否したりするのが、何か取り返しのつかない悪い結果を來すかも分らないといふやうな、より、不可思議なより無氣味な豫想に彼女は脅かされた。

「それでは、兎に角、御預りして置きます。」

斯う言つて、柳子が指環の箱を取り上げて、それを押し戴いた時、夫人は忽ちその兩の手に面おもてを覆おほふて、聲を立てて泣き出した。すると彼女の從兄も、彼女の上へ新しいハンカチーフを投げかけてやつて、徐しかにその席たを起つて、縁側の方へ出て行つた。

生憎降り出した雨の中を、停車場までにもせよ、わざわざ見送つて貰ふことは辭退して、藤島喬とも門のところで別を告げた柳子は、さくさくと濡れた砂に食くひ入る車輪の音を、ほろをかけた俵の上に聞きながら、再びまた列車の窓まどに肘ひじをかけて、そのこめかみの邊あたりを指頭ゆびさきに抑へながら、あの病室の中の異常な場景と進行とをしづかに反芻して見た。そしてあの時不自然に、不可解に感じられたものは、たつた一人つきりになつてゐる彼女にまで、一層不自然に一層不可解に感じられて來た。

その上、新橋驛から下車して、銀座通り、色色の飾しやうあんさう窓などをのぞき歩きながら、彼女のバックにはひつてゐる例の夫人からの贈物が、彼女の推定通りのほんものであることをだんだんと信じ出した時、彼女はあんな夢のやうな會見から、そんな現實的な結果を握つてゐることを、いよいよ氣味悪く空恐ろしいやうに思はないでゐられなかつた。

けれども、二三日の内にはきつと又上京すると約束した藤島は、四日目五日目になつても何故か訪ねて來なかつた。端書ひとつくれなかつた。

切めて加治木にきて見たら、何かの様子が分るかも知れないと柳子は思つた。しかし、彼に會つた場合、あの夫人からの贈物について、全然黙つてゐることは出來さうにもなかつた。そして事によつたら、もとの所有者へ返さねばならないかも知れないあの贈物について、あまりに急いで「蛇殺」のやうな人物へ報告することのあぶなつかしさが考へられた。

さうかうする内に、××座で開演といふ芝居の稽古がはじまり、一日一日と忙しくなつて來るにつれ、彼女は犬塚と縁のたか子との蠱惑的な境遇のことをも、満更あの儘の幕切れにもならないであらう延雄との關係のことをも、並びに平塚から持歸つた輝く石と、丁度あれのやうに透き通つた、あの若い夫人のあの涙との事をも、忘れるともなしに忘れてすごした。

その彼女が、芝居の蓋の開いた二日目、つまり平塚へ行つてから十一日目の午後、夜來の寢不足を補

ふつもりで一寸横になると、その假睡の中に彼女は夢を見た――

靜かに暮れて行く海濱か、それとも外の暗い窓際に、一人の青年が背向きに立つてゐる。背向きにちかかはらず、彼の盲人であることははつきり分つてゐる。

さうだ、此人がこちらへふりかへつて見ない内にと、さう思つて柳子はうしろからそつと青年の手を握つた。青年の手は氷のやうに冷かつた。

そして、「貴女もこの手につかまつてゐらつしやれば」といふ聲は、平塚であつたあの若い夫人であつた。目の見えない青年がいつの間にかその夫人に變つてゐたのである。「今に、よくなります。きつと、よくなります。なんにも心配なことはありません。」

柳子は、自分の體もだんだん冷えて行つて、しかもそれが何とも云へない快い感じで、なるほどなんにも心配なことはないやうに思ひ出した。

「さうだ、私もあの夫人と同じやうに大理石の彫像になつてしまつた。いいえ、大理石ではない、ダイヤモンドだ！」

斯う思ひながら目を舉げて見ると、それがもう自分達であるかどうか分らないけれど、とにかく燦爛たる大金剛石で刻まれた二人の群像が、白金の大きな臺座の上に立つてゐる。

そして、その臺座の前に大勢の人間が跪いて、何かを頻りに祈り求めてゐる。よく見ると、彼女自

身もその群衆の一人になつてゐる。

群衆はやがて祈りの聲を一段と張り上げながら、その臺座を神輿のやうにかつぎ出した。それがあまりに激しく揺ぶりながら、あまりに急いで駆け出すやうになつたのを、はらはらしながら見てみると、どつかの大きな工場の煉瓦塀かなにかにぶつかつてしまつた。そしてかちやりといふ微かな響きと共に、コップでも壊れるやうに壊れてしまつた。

——こんな他愛のない夢から覺めた柳子は、誰かが梯子段を下りて行つてゐることに先づ氣付いた。それから自分の手の届く位な處に、一通の封書が置かれてゐることを發見した。

それは、彼女が忘れたやうに見えながら、ちつとも忘れないでゐた平塚からの、あの夫人の従兄からの手紙であつた。柳子は、すぐに破けない封筒の端を性急に噛みちぎつて、十枚以上も一綴にされてゐる黄色いレター・ペーパーを引き出した。そしてその指頭を打震はせながらそれを讀み出した——

『私は、先日御多忙の貴女を平塚まで引張り出して、色々御迷惑を御掛けした男の藤島喬です。』

あれから二三日の内に必ず上京、御詫びや御禮をも申上げるつもりでゐましたが、またちやんと其御約束をもして置きましたが、丁度あの日の晩あたりから、病人の容態が急激に險悪になり出し、ついその側を離れにくくなり、尙ほその他に種種取込んだ事もありましたので、誠に不本意ながら違約の上に、すつかり御無沙汰、大變に失禮してしまひました。

従妹は、油の盡きた燈火の消えるやうにして、一昨日の朝、たうとう亡くなりました。

只今、彼女の良人と、妹と、私と三人で、一夜の中に白い冷い灰になつてしまつた彼女を、山寄せの火葬場から連れて歸りました。そして其小さな壺の安置されてゐる隣の室で、次ぎの上列車で出かけるまでの時間を盗んで、この慌しい手紙を書き出します。東京へ参りましてからの二三日間は、恐らくはもつともつと忙しいことであらうと思ひますから。

私がおんなにも、貴女への手紙を差上げることに急ぐのは、勿論單に先日の事に對する、御詫びや御禮を申上げる爲めばかりではありません。私は亡くなつた従妹からの傳言を頼まれてゐるのです。彼女が息を引き取つたや否や、貴女へ傳言してくれと頼まれてゐるのです。

それを彼女ははじめ、直接貴女へ申上げるつもりでした。そして實は、その爲めにこそ貴女にわざわざの御足勞をも願つて見たのでした。

けれども、實際御目にかかつて見ると、あの通りなんにも申上げることが出来ませんでした。そしてその事を、あとでどんなに残念に思ひ、どんなに彼女自身の意氣地なさとして自責したか、一寸申し盡せない位でございました。

このやうに、自分自身に到底出来ない事であると思ひあきらめた彼女は、彼女の亡くなつたあと、私が彼女に代つて、貴女へ申上げることとしてくれと申しました。特に私がそんな役目を引き受けさせ

られたのは、一にはこの私のほかの何人にも、打明けて相談することの出来ないやうな事情を、彼女の小さい胸の中に秘し藏めてゐたからであります。

「偕て私は、あまりに内氣すぎた彼女の代辯者として、何かから貴女へ申し上げたものでせうか？」

先づ貴女は、私共が貴女の過去の御生活について、いつぞやの「婦人の世界」とかに書かれてゐたものなぞより、ずつと以上に聞き知つてゐるのだと思つて下さい！そして貴女が今から二十六七年前に、貴女の御親類である一旅館に於て、中年の一美術家と親しく御成りになつたことを思ひ出して下さい！その時、やつと十八か十九になつたばかりの貴女が、その美術家の子の母になりかけたことを、流石に御忘れになつてはゐらつしやらないでせうね。

けれども、大相な御難産をなすつた貴女御自身にまで、死産として告げ知らされてゐましたのが、それがうそであつたことは、貴女に對しての深切から出た虚偽であつたことは、今日の貴女も、恐らくまだ御存じでなからうと思ひます。

幸か不幸か、この世の光に浴し得たるその赤坊は、薬の上から美術家の妻の姉である、私の母の處へ引き取られ、一年ばかりの後美術家の家へ連れて行かれました。そして美術家と、その妻と、その妻の姉とのほか何人からも秘密をのぞかれないで、無事に、すこやかに、そして美しく（私は斯う言はして貰ひたいのです）成長して参りました。

そしてそれが、私のあの従妹です！いいえ、實際は單に、私の叔母の良人の娘であるところの、あの可哀相な女です！」

十行ばかり前から、水の中をもぐつてでもゐる時のやうに、異様な刺戟を耳に感じ出しながら讀んでゐた柳子は、この處まで讀んで來て、覺えず手にしてゐたレター・ベエバアを取り落した。突然に目の前が眞暗くなつてしまつたからである。けれどもやがて、脈膊と呼吸との蘇生につれて、辛うじて目を開くことが出来るやうになつた時、彼女は直ぐにまた手紙のあとを讀み續けた――

「しかし、二十歳を越えるまで、私の従妹をしてその事を知らしめないで置いたほどの私の叔母であつた故、それほどに私の従妹を、叔母自身の物にしてしまつてゐた故、彼女が自分の生みの母でなかつたことを、はじめて聞き知つたときの従妹の驚きは、悲しみは、いいえ、そんな言葉では到底言ひ現はすことの出来ない總ての心持は、ただただ各人の想像にまかせざるよりほかはない。

とり分け彼女に堪へがたかつたのは、そんな身の上である由を、私の母から聞き知らされた後も、矢張り私の叔母にまで、素知らぬ顔をしつづけて行かばならないことであつた。

加之、彼女がさうした恐ろしい發見の迅雷に撃たれたのは、折も折とて彼女とその従兄とが、周囲から許されない結婚を押し切つて實現すべく、相携へて國外にまで、び出さうと企ててゐた、否、その企てを實行しかかつてゐた際の事であつた。そして其結果は、一足さきに出てゐた私と、一足あとに残つ

てゐた彼女との間を、むごたらしくも永久に引き裂いてしまつた！

その後、彼女が結婚するやうになつたことの経過については、私は彼女から、少くとも彼女からはなにも聞かなかつた。聞かうとも思はなかつた。

また彼女等の結婚が、幸福なものであつたか否かといふやうなことにしても、成るべく考へて見ないことにした。彼女が亡くなつてしまつた今日でも、矢張り考へないで済む限り考へないで置かうと思ふ。それが彼女の爲めであるよりも、むしろ私の爲めである故に。

私達が再び單なる従兄妹同志として、六七年振りに會つた時、私達は二人つきりで話さうと思ふ、殆んど何物をももつてゐなかつた。さうして話し合ふことを待たないで、既に十分に總てを理解し合ふことが出来たからかも知らない！

そんな事は此場合どうでもよいとして、彼女もさきほど申上げた彼女の秘密と、何時その秘密を私の母からきかされたかと云ふことについては、切めて私にまで打明けないでゐられなかつた——彼の良人にさへも多分知られないでゐるのであらうに。

否、彼女が私にまで打明けたのはそれだけでなかつた。彼女は偶然に目を通した「婦人の世界」の記事からして、横田町子さんであるところの貴女が、彼女を實際に生んでくれた人であることをたしかめたとのこと。

どうしても一遍御目にかかつて見たいといふ誘惑に勝てなくなつて、どつかの劇場の樂屋口まで行つて、そのあまり深切でもない受付のところまで、まごまごとまごついてゐた時、ひよつくり貴女らしい人が目の前に現れたので、すつかり度を失つてしまつて、その儘何の要領をも得ずに歸つて來たこともあるとのこと。

切りぬいてゐた貴女の寫眞を、いつか彼女の良人に發見されて、ひどく不審がられて、面喰つたことなどもあるとのこと。

これらの事を私に打ち明けたあとで、改めて彼女は、彼女の命のある内に、矢張りもう一度御目にかかりたいといふこと、そして親であり子であつたと、せめてそれだけをでも申上げて置きたいといふことを申し添へました。

貴女の前ですけれど、私の従妹が何故にそれほど貴女に會ひたかつたか、何の爲めに貴女の子であることを貴女へ御知らせしたかつたか、それは恐らく彼女自身にもはつきりしてゐなかつた事と思ひます。私にも、よくは分りません。

ただ私が思ふのに、彼女は本當に不幸な人間でした。そして貴女も——こんな事を申上げることの失禮を恕して下さい——貴女も恐らくは彼女にゆづらない位に不幸な方でせう。そしてそんな不幸な二人が親であり子であることを思へば、否それよりも、親であり子である故にこそ、そんなにもお互を不幸

にしあつてゐたことを思へば、どうしてその二人が、無頓着にしあつてゐられるものでせう！

さうです、彼女は貴女と一緒に泣きたかつたのです。自分一人では、泣いても泣いても泣き盡せない自分の運命を、お互の運命を、貴女と手を取り合つて、本當に泣き盡してしまひたかつたのです！さうして、事によつたら、その一番悲しい、一番幸福な瞬間に死んでしまひたかつたのです！

ともあれ、一切が手おくれになつてから再び彼女に會つた私は、せめてさうした彼女の願ひでもかなへさしてやるよりほか、彼女の爲めに何をしてやることも出来ませんでした。

けれども、さうして貴女を平塚まで御案内した結果は、貴女も御承知の通りです。」

この邊まで讀んで來たとき、柳子は殆んど何を読んでゐるかを意識しなくなつてゐた。そして峻しい阪路を登り疲れた人のやうに喘ぎ喘ぎ、ただその目だけであとを讀み續けた——

『あの時、彼女から貴女へ差上げた指環に、そもそもどんな意味が籠つてゐたかといふことも、只今ではもう十分に御解りになつていただけると思ひます。

せめては、彼女の切ない思ひを封じ込めたあの小さい贈物を、いつまでも貴女の御手許へ置いてやつて下さい。

時計を見ると、まだ十分ばかりありますが、しかし、このきりに書くべき事は、一通り書いたやうに思ひます。あちらへ行つてから、もつと落ちついてから、書き落してゐたことは書き足すつもりです。

尙ほ、これから先き、折々御目にかかる機會を與へてさへ下さるならば、私は貴女の私にだけきかして下さるお話と引きかへに、瓊ちゃん——從妹の名は瓊子と言ひました——の小さい時分の事や、ほんの短い間ながらこの私に生き甲斐を感じさせてくれた時分の事などをお話しいたしませう。

さうだ。彼女のいよいよの臨終の模様について、一言書いて置くことを忘れました。彼女は恐らく何人のより寂しい、けれどもまた何人のより平和な微笑を、その唇邊に残した儘に息を引き取りました。

彼女の四つになる女の兒については、それがもう祖母の兒になりきつてゐることから、どれだけかあきらめよくされてゐたやうです。

彼女の母と云はれてゐる私の叔母については、それがまたいつの間にか、瓊子の母から瓊子の生んだ兒の母にまで變移してしまつてゐることから、一層あきらめよく別れて行けたやうです。

彼女の良人については、彼女がどういふ心持で別れて行つたかを、私の口から申上げることが遠慮いたします。

ただ、その意識が稍や朦朧として來出した時分、その枕元から彼女をのぞき込んでゐる良人にまで、彼女は斷片的に、そして極めて低い聲で囁くやうに申しました。それは彼女の良人にまで殆んど聞き取れなかつたやうですが、彼の背後にゐた私にははつきりと聞えました。なぜと云つて、それは私達のすべてがまだ、これほど不幸にならないでゐる日に、けれどもちやんと今日を豫感したかのやうに、この

私が作つて、私の友人に曲譜を添へさせた、「かなしき朝」といふ歌の一節でしたから。
かなしきは皆美しきかな

この朝の落花の如く

これはいよいよペンを拭ひます。左様なら、

十月七日

花房柳子様

藤島喬

手紙を読み終つた後、いつまでも其最終の頁を、とり分け、「花房柳子様。藤島喬」といふ最終の行を見つめてゐた柳子は、やがてその手紙のレター・ペーパーをまるく巻いて、盛り上り、長火鉢のそばへ寄つて来て、生温いお湯を湯呑について一口飲んだ。その爲めに却て一層胸が痛くなつたやうに思つた時、敷島を一本口に啣はへて、それにマツチをすりつけた。そして一口吸ひ込んだあとで、はじめてそれが逆に啣はへられてゐたことに氣付いた。

彼女がそんな情態にゐるところへ、例の晩以來會はなかつた夏山緑のたか子が、丁度店の方の休日であるのを幸ひ、方を廻つた序だといつて訪ねて來た。碌碌挨拶も濟まさない内から、もうたか子は、柳子の殆んど失神したやうな、その癖異常に興奮してゐるらしい様子に驚かされた。

「何か善くない事件でも起きたらしのね。」と言ひながら彼女は、「ウソを言つても駄目ですよ。」といふやうに目で脅かした。

「私の、たつた一人の妹が死んだの——久しいこと會はないでゐたのが！」と言つて、柳子はだしぬけに咽泣きをはじめた。

「さうですか！そして今迄、そんな方のあることは何はないでゐましたが、まだ御若かつたでせうね？」
「ええ。」と言つて、柳子は更に新しい涙を加へて來た。

それから、たか子もいつの間にか貰ひ泣きをはじめながら、一體何時亡くなつたのかをきいて見た時、そして柳子がそれに正直な答へをした時、たか子は喫驚したやうに言ひ出した——

「まあ、不思議ね！水上さんの奥さんも矢張りその日の、そしてその時刻ぢやありませんか！」

「水上さんの？」と柳子も喫驚したやうに言つたが、見る見るその顔から血の氣がなくなつて行つた。

「あら、貴女は御存じない？さうですか！」と言つて、一寸考へ込んだあとでたか子は言ひ添へた、

「實はね、さつきやつと御悔にだけ上つて來たところなの。なにしろ犬塚があんなだもんですからね。」

「緑さん！たか子さん！」と殆んど絶叫しながら柳子は、飛びかかるやうにしてその友人の肩に兩手をかけた。「水上さんの奥さんは、片瀬に……片瀬にゐらしたの？平塚ぢやなかつたの？」

「まあ、どうしたの？貴女は！」とたか子はその友人の問ひに答へるよりも、その度外れな興奮に壓

倒されてしまった。

「片瀬、に、あらしつたと、そう言つて下さい！」と柳子は洞穴からでも出て来るやうな聲で、目をつぶりながら再び叫んだ。(このときの彼女の恐ろしい顔を、たか子は永久に忘れることが出来なかつた)。

「柳子さん、もつと落付かなくちやいけませんよ。」と彼女の深切な友人は、彼女を落ちつかせるつもりらしく、自分の肩から友人の両手をとりながら静かに言つた。「水上さんの奥さんはね、最初片瀬の方に行つてらしたんださうですがね、この春頃からか、平塚へ御變りになつたんだとか——」

たか子の言葉の終るのを待たず、柳子は不意に背後へ仰向に倒れてしまつた。文字通り悶絶したのである。

けれども、それほどの久しい時間を経たない内に、ともかくも一應の正氣にだけは復つて来た。そして頑なな沈黙のまま、深切な友人から色色に介抱されてるところへ、劇場からの迎への人力車が来た。即刻それに飛び乗つて来て貰はなければ、取り返しのつかない事になるとの事であつた。

詮方なく、たか子に付き添はれた儘樂屋入りをした花房柳子は髪をつけるにも、顔を拵へるにも、衣裳をつけるにも、殆んど全く彼女自身の手を用ゐなかつた。より以上にその心を用ゐなかつた。

そして、幕の上るまでに舞臺へ引き据ゑられた彼女の役は、ある虐愛症患者の若き妻として、彼から荒縄で縛られたり、強盗から脅かされるやうに脅かされたり、刀の峰打ちを食はされたり(その筋の注意

に)より、今晚からは鞘で以て打たれることになつてゐた。髪の毛を引つかんで引き摺り廻はされたりした揚句、つひに彼の隙をねらつて舞臺外へ逃げ出してしまふといふのであつた。

● 借愈愈幕が上つて、それらの残忍な虐愛的動作がはじまつた時、殆んどすべての臺詞を思ひ出せなくなつた柳子はただ、それぞれの打撃に反應して、悲鳴を、苦惱の叫びをのみ舉げてゐた。

虐愛者になつた相手の男は、彼女に身近く寄つた度毎に、「せり、ふをどうした？」と小さな聲で詰りながら、だんだんと苛立たしさを増して来たらしく、直劍に苦痛を彼女へ加へるやうになつて来た。

それが又彼女を刺戟して、彼女の悲鳴と苦惱の叫びとを、一層本當らしい、一層聞くに堪へないやうな、痛ましいものにして行つた時、招待席の欄干から乗り出して見てゐた、年の若い一人の劇評家などは、彼女の慘憺たる脱線ぶりを憫むよりも、寧ろその無技巧の『迫真力』に感激の手記を取つてゐた。

あはれなる柳子の第二の役は、男女二人つぎりの人物から成立してゐる一幕物の戀愛劇で、殆んどはじめから終りまで其幸福に酔ひつづけてゐるやうな女主人公として、長い叙情詩のやうな對話をしたり、より長い叙事詩のやうな獨白をするといふのであつた。

そんな役をも、彼女自身は辭しないのでやううと言ひ張り出した。彼女にとつてはもう、すべてのもののやり過ぎになつたり、反對になつたり、顛覆されたりしてしまふことが、むしろ一番願はしいことのやうに感じられ、來てゐるからである。

けれども、結局たが子の夏山縁が、今晚一晩だけ、柳子の代りとして、二度と踏まないつもり舞臺を踏まされることになり、柳子はその儘、再び人力車で彼女の家へ送り返された。

人力車から下りて、二階へ上つて来た彼女は、何気なく窓の方を見やつてぎよつとした。そこには盲目な一人の青年が背向きになつて、黙つて突立つてゐたからである。

けれども、それが彼女の歸りを待つてゐてくれたのだと氣付いた時、彼女は安心して彼に近づいて、そつと彼の手を握りしめた。

すると、それは氷よりも冷い、けれども快く冷い平塚の夫人の手で、やがて「かうしてゐらつしやると、直ぐによくなります！ なんにも心配な事はありません！」といふ夫人の透き通るやうな聲も聞えて来た。

そして追々に、柳子の體も夫人のそれと同様に、まづ大理石に、それから燦爛たる大金刚石になつて行くやうに思はれた。

「今の中に！ さうだこの時を逸してはいけな！」

斯う考へながら、彼女はさきほど舞臺の上で、残忍な虐愛症患者から氣持よく引つくくつて貰つたところの、あの荒繩を捜し出した。そして遂にそれが、箆筒の上から二つ目の抽斗に見出された時、彼女は彼女の旅立に必要な、すべての物の備はつてゐることを思つて嬉しかつた。

備て、いつの間にか彼女自身の手で吊したカーテンを押し分けて、眞晝のやうに明るい窓の外へ首を出つた時、彼女は例の夫人からの贈物を思ひ出した。そこで箱から取り出された其指環に先づキスしてやり、指にはめてから再びキスしてやつた。

「もう宜い！」と心の内に言つたあとで、またいつの間にか彼女自身が据え置いた足臺にのつた彼女は、さうして前よりも一層高くなり、一層明るくなつた窓から首を出した。すると、さつきのカーテンが再び虐愛症患者の用ゐた荒繩になつて、するすると動きながら、快く彼女の頸部を摩擦した。

女優花房柳子が自殺してゐたのを、その友人の縁のたが子は二時間ばかり柳子よりおくれて、柳子の處へ廻つて来て見て發見した。

藤村の『落花』は、

大正十一年四月十五日印刷

行巻... 藤村の『落花』は、大正十一年四月十五日印刷... 藤村の『落花』は、大正十一年四月十五日印刷... 藤村の『落花』は、大正十一年四月十五日印刷...

大正十一年四月十五日印刷
大正十一年四月廿二日發行

落花の如く
定價金貳圓拾錢



著者 生田長江
發行所 東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社 天佑社
電話九段長一〇二七三番
撥替東京一〇二二八番
發行者 東京市小石川區諏訪町五番地
日岐久次郎

東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所 友文社

東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷者 檜山定吉

ル・ゾラ 性的文藝傑作集發行

文豪ゾラは寫真小説家の鼻祖なり。其の傑作は、不幸にして其の筋の許可する所とならざるもの多く、又未だ我國に紹介せられざるもの多し。本社、茲に見る所あり。今回特に其の性的戀愛に關する傑作を選擇して江湖に推薦することとせり。

第壹卷 怖ろしき夢魔

四六判羽二重表裝
定價 金箔押細活字印刷
貳圓八拾錢
送料 拾七錢

愛妻の過去に於て情夫あるを知るや深夜列車中に於て人知れず之を殺害する嫉妬狂の兇行より事件は展開し、婦人の柔かき、温かき肉體の魅惑を感じれば忽ち其の血汐を見んとする劇しき變態性慾狂の青年は遂に其の情婦を山間の廢屋に殺害するに至る。其の間、熱烈なる戀愛と、己が戀を遂げんが爲め、非常なる大惨害を演ずる少女等變態性慾者を描寫して戰慄を感じしむる有名なる大傑作ラ・ベート・ユーマエンの完譯也。

第貳卷 苦き歡樂

四六判羽二重表裝
定價 金箔押細活字印刷
貳圓八拾錢
送料 拾七錢

空想の事業に耽りて而も絶えず死の恐怖に戰く變態青年に巨萬の財産を遺消されて悔いざる美しき一少女は、貪婪飽くなき老婦に苛なまれながら尙且つ之を忍び、内心に秘む激しき嫉妬狂の爆發を制しつゝ遂に熱烈なる自己の戀を他の女に譲つて血涙に咽びながら病者と同情して其の家に止まり、まだうら若き青春の美貌をも犠牲に供して一生を終る獻身的愛を描きたる傑作ラ・ジヨア・ド・グイヴルの完譯なり。

與謝野晶子夫人著 中澤弘光畫伯裝幀

六版 晶子歌話

四六判箱入美裝
定價壹圓八拾錢 送料拾五錢

短歌界の權威與謝野晶子夫人、其熱と香味とに富む才筆に由り、新たに短歌の作法を細叙して、特に象徴的短歌を鼓吹し、併せて師友及び夫人自身の優秀なる作例を講じて、歌壇近時の常識主義、客觀主義、擬古主義の流行に反對し、専ら新理想主義、新熱情主義、新浪漫主義の創造を高唱せらる。大正の短歌之に由つて、再び純正叙情詩の花園に、四季永芳の薔薇を開かんとす。世の短歌の作者と讀者速かに「晶子歌話」一冊を手に入られよ。

エレンケイ原著 原田實氏全譯

二十版 戀愛と結婚

四六判大册美裝箱入
定價貳圓四拾錢
送料拾八錢

人生の根本問題たる戀愛と結婚とを論じて、微に入り細に徹し、固陋なる因襲道徳を駁撃粉碎して、真正の道徳を樹立せんとせるエレンケイ女史が最大代表作の全譯にして、全篇燦爛たる天才的直覺と詩藻の閃めきとを以つて、珠玉を聯むるが如し。社會改造の大喚聲を徹底的ならしめんとせば須べからく本書の如きによりて、改造の方針を確立せざるべからず。

文壇拾貳名家擔任執筆

ワイルド全集

藝術の爲の人生か。人生のための藝術か。唯美主義。官能主義、色情主義の藝術化されたる大名著は悉く收めて此寶庫にあり。(各巻抜買ひ隨意)

第一卷 (小説集)

目次 ◎オスカア、ワイルドの生涯……本間久雄◎ドーリアングレイの畫像……矢口達◎アーサー、ザヴィル卿の犯罪……秋田雨雀◎カンタウイールの幽霊……同人◎模範金満家……同◎WH氏の肖像……同人◎秘密の無いスフィンクス……矢口達

第二卷 (戯曲集)

目次 ◎サロメ……中村吉藏◎フロオレンスの悲劇……本間久雄◎マザウア公爵夫人……楠山止雄◎ウキンダミーヤ夫人の扇……島村民藏◎理想の夫……坪内士行

第三卷 (戯曲及童話集)

目次 ◎ゴラ……小山内薫◎眞面目なることの必要……谷崎精二◎何でもない女……河竹繁俊◎柘榴の家……矢口達

第四卷 (詩集)

全部 日夏耿之助氏執筆

第五卷 (論文集)

目次 ◎空想類……矢口達◎ペン、鉛筆及毒藥……本間久雄◎藝術家としての批評家……島村民藏◎深き底より(獄中記)……神近市子◎假面の眞理……小山内薫◎社會主義と人間の靈魂……本間久雄◎維新……矢口達◎イント細活字印刷中判形箱入紙數七百頁内外リード製金箔押、第一(各册一、二、三、四卷各貳圓八拾錢、五卷貳圓七拾錢、送料各册金拾八錢)

杉森孝次郎氏著 (中判編入、クローヌ本定價) (四六判六拾錢、送料拾七錢)

新刊 新社會の原則

本書は新思想界の權威たる著者が多年の研究と表現の總
練たり、著者の偉大なる知識と哲學と思想とは諸種の問
題を解決して永遠に本質的光明を放ち、新しき社會の原
則を提唱す。混沌たる思想界は蓋し本書に依りて其の歸
趨を知るを得ん。著くば速かに一本を手に入れよ。

西宮藤朝氏著 (四六判クローヌ本箱入、定) (價貳圓八拾錢、送料拾七錢)

再版 思想問題大觀

思想問題の論ぜらるゝ事、今日よりは盛なるはなく、復
雜紛糾せること思想問題より甚だしきはなし。著者は社
會問題の途に哲學思想に至らざるべからざるを思ひ、茲
に多年の研究を傾倒し、特に社會問題と哲學思想との歴
史的關係及論理的關係を通じて見たる思想問題を明快に
叙述せり。されば有ゆる思想問題を最も深き境地に於て
即ち哲學的見地に於て理解せんとする者は今日の處本書
を讀いて他に求むべからず。

與謝野晶子夫人著 (四六判クローヌ本箱入、定) (價貳圓六拾錢、送料拾七錢)

再版 人間禮拜

與謝野夫人の思想、多々益す進化して已ます。各人の内
にある人同性の尊嚴と全能とに對する極度の讚美禮拜、
れ實に本書を一貫せる夫人最近の主張なり。この思想多
方面の問題に互つて、敏慧透徹の考察を下されたれば、
現代に於ける何人の實生活にも觸れて、最も適切なる改
造資料となるを疑はず。殊に男女を問はず若き人々の心
胸は之を讀んで豐麗なる感激の中に、各自の未來の堅實
なる文化行程を豫見せらるゝならん。

馬トランド、ラッセル原著 (四六判クローヌ箱入、定價) (價貳圓四拾錢、送料拾七錢)

再版 新哲學綱領

社會改造の大獅子吼をなしたる同氏が哲學は生活改造の
原動力たる事を説明せんが爲めに、實用主義の新哲學を
創設せり。本書は實に其の最初の提唱に係るものにして
「哲學は一片のパンだに焼く」といふ、古來の非難を一
撃の下に打破したる快著なり。社會改造の原理を讀みた
る諸氏は併せて本書を讀まざるべからず。

506

68

終